
泥棒達の引かれ唄

古時灯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥棒達の引かれ唄

【Nコード】

N3225E

【作者名】

古時灯葉

【あらすじ】

買ったばかりの鞆を盗まれた『彼女』と盗んだ『彼』。盗まれた鞆を取り戻そうとする『彼女』が彼らを取り巻く人達も巻き込んで……。タイトル、シーブスから変えました。気分です。

1st：白昼堂々の悪夢

西都の街並みは、徐々に冬の支度を済ましていく。そんな、ある昼下がりのこと。吐息が白く濁り始め、空気が最も透き通る晩秋の一場面。街の大動脈となる大通りにて。

「痛ったあー。なんなの？ もう！」

尻餅をつき、じんじんと痺れる身体から、ローテはほぼ条件反射で叫び声を響かせた。

そうだったのは、真正面から誰かとぶつかったから。浮かれて、前をきちんと見ていなかったローテにも勿論、非はあった。

けれど。

「きちんと前向いて歩きなさいよ。ってあれ？」

不機嫌な調子の口が止まる。首が振り切れてしまいそうなほど辺りを見回して、異変に気付いた。左右に二往復してから発した絶叫。首を振ってばらばらになった赤褐色の髪が一拍遅れて、元の位置に治まる。

「鞆がない！！」

こういうときに限って、うなじに張り付く髪が妙に気になってしまふ。

ちょっと待ってと、足元ものぞいてみる。

通りを形作る石畳が、例外なく平らに均されて整然と並ぶ。それ以外、なにもない。

彼女は、その美貌が台無しになるくらいに顔を悔しそうに歪めた。それも、そのはず。お金を貯めに貯めに貯めて、その上弟と妹の貯金をこっそりとくすねてようやく手に入れた鞆だったのだ。

それも今日。ついさっき買ったばかりで。

ぶつかる前までは、左腕に大事に掛けていた。

ショックでピントがままならない視界の端で、駆け出していく背中が目に入った。疾風のごとく駆け、小さくなっていくその姿。子

供だ。

何の迷いもなく、一直線に遠ざかる後ろ姿から、さよならをするように紐がのぞき、揺れた。

さっき買った鞆だ！

「ちよつと、待ちなさいよ！ 泥棒！」

そういわれて、待つ人がいるのだろうか？ いや、いない。もしそうならば、ただのマヌケかお人よし。残念ながら、彼はそれらには当て嵌まらないようだ。彼女の声に耳を貸さず、後ろ姿が雑踏にあつという間に溶け込んでいく。

「最悪！」

現場には、明らかに怒りを示す彼女。

中洲の周りを流れる川のように彼女を避けて流れる雑踏。

間抜けな被害者を物珍しそうに眺める見物人が多少残されていた。彼らの好奇心な視線にローテは、はつと気付いた。

強張った表情を緩めて、照れるかのように恥じらい、肩をすばめた。縮こまった笑みを、見物人一同に見せながら。

立ち上がって、ジーンズを二三度叩く。俯いたときに、服の隙間から、素肌を覗かせ、冬仕様の上着でも隠しきれない膨らみを持った、張りのよい胸の谷間を下着ごしに垣間見せた。

彼らの視線がそこに集まる。が、すぐに目をそらした。あらぬ方向に視点を定めあわせて一様に、気まずい空気を作り出す。赤く染まった頬は隠せない。

けれど、冷めたような敵意ある視線を送る者も、同じ数くらい存在していた。

彼女は、気付いていた。

汚いものを見るかのような蔑む視線。

赤毛だからという単純な理由で。

たえそうであろうとも、私は私なだけだね。

ローテは敵意も好奇心も混じる、幾重もの目に萎縮せずに、むしろ堂々と振る舞った。

「ごめんなさい、恥ずかしいところをお見せして」

さっきまでの彼女とは、思えない丁寧な口調。おしとやかに歩き始めると、そんな一言を言うとは思ってもいなかった見物人の一角が驚いたように、二つに分かれた。

「ありがとう」

ローテはその外見に似合う、初々しく、可愛らしい、純真な少女を演じた。

けれど、彼女はその仕草と間逆に焦っていた。

（どうする？ 本末転倒じゃない。盗まれるって）前歯で唇を噛みしめる。（絶対、許さないわ）そう決意した。とにかく、後を追うことに決める。

そのためには。

「あっ」

偶然を装ったように見えて、本当にたまたまだった。けれど、彼が見物人の中に混じっていたことは一目見て分かる。どんなに、うまく隠れていても、見つかるものは見つかるのだ。その長身は、見物人の中でも一際目立つ。

フィル・アクイス。ローテの男友達。弱冠二十歳にして、この街の治安の元締めである警備隊員。彼女よりも、二歳年上だ。

声をかけられた彼は、あからさまに笑っていた。快活ではなく、むしろぶざまに盗まれた彼女を、からかっていた。

しかし、一歩後ずさる。

何十回分も溜まっていような不機嫌さを察知して、逃げ出そうとした彼を、にこやかに彼女は腕を素早く絡ませた。

フィルは振り払おうと、努力をしたけれど、外れない。蛇のように柔らかで、狡猾だ。フィルの顔から血の気が失せる。

彼の視点がぎこちなく下を向く。

「こんな所で会うなんて奇遇よね」

断る事を許さないような純粹な笑顔。純度百パーセント。薬よりも毒だ。まさしくそうだ。張り切った風船に針を突き立てる事を強

制されたような気分になっていくフィル。実際について最近、行われた職場の飲み会でそれに近い事をやらされたりする。

どうして、俺は貧乏くじばかりと嘆きたくなる。が、その原因の多数が彼女絡みだと、そこまで彼の頭はまわらなかった。

腕を絡ませられたフィルに、敵意ある視線が幾十にも突き刺さる。見物人達がうらやましそうに彼を睨んでいた。傍目から、正面から、どこから見ても、美少女であるローテと手を組んでいるからだろう。実際、そんな嬉しいわけじゃないと、途方にくれるフィルの頭にふと格言が浮かんだ。

東国の古いそれは、職場の日めくりの暦にでかでかと載っていたから、まだ覚えている。上司の東洋趣味の影響が、こんなところまで知らず知らずのうちに浸透していた。

『綺麗な薔薇には刺がある』

2nd：弱みを握られた男の末路

二人は自然と街中を歩いていた。腕を仲良さそうに絡ませているその光景は、まるで恋人のように甘い。

が、その行動の裏に絶対零度の心理戦が行われているとは誰が知ろう？ 当事者二人だけが知るなり。

「仕事さぼってさ。早く捕まえてよ」

蜂蜜のように甘いローテの囁き。まるで、恋人同士のように、フィルに身体を寄せる。しかし、彼がガードを緩めた途端、鋭い毒針が突き刺さる。絶対に。

「俺も毎日が仕事ってわけじゃない。今日は、本っ当に珍しい休みの日なんだからな、少しくらい楽したっていいだろ」

返しながら、今にも壊れそうな吊橋を渡っているような気分になっていくフィル。だんだんと、肩が強張る。でもどうにか、悟られずに笑ってごまかした。

「だけど、お前が盗まれる立場ってな」

「泥棒一人も捕まえられない警備隊に言われたくないわ」

ローテはあからさまな皮肉を返した。まだ、大丈夫だ。牽制程度。仕方がないだろう。そういう方針なんだから」彼は、彼女の耳元で囁く。

「『いつも、踏ん返り返って、警備隊を馬鹿になさる大富豪様は自分の身は自分で守れるでしょう？ だったら、勝手に自分等で警備をなさってください』って」

「じゃあ、今のは？」

食ってかかるように、フィルの眼前で言い放つ。彼の漆黒色の髪がふわりとローテの吐息で浮かんた。

「あれが魔術師なわけ？」 感情にまかせたようなローテの言い草に、ふとフィルの口が緩んだ。

「自分のケツは自分で拭けってことだ。今までやってきた行為のつ

けだな」

「セクハラ発言だ。イアンさんに言い付けるから」

イアンは、警備隊第二部隊の副隊長。そして、フィルの上司。

彼の名前が出て、フィルの顔が一変する。

恐れていた事が起こってしまった。

例え、それがセクハラとしては軽度だとしても、彼女にかかれは大騒ぎでは済まなくなる。火のない所に煙はたたない。が、燃え広がっているようには見せ掛ける事はある。ローテにとって、そんな情報操作は朝飯前だった。

「ちよつと待て。イアンさんが聞いたら、俺の休みが減らされる！ 今日だって一ヶ月ぶりの休みだったのに！」

フィルは職場である警備隊の中でも最も年下であった。実力主義なのに、微妙に年功序列が適用される組織の中で、実績のない若者は双六のスタート地点にいるようなものだ。どんどん休まずに進めと言わんばかりに、休みが冗談抜きにない。

人気ある職業の内情はこうである。しかし、就職の人気は冷めることがない。

もちろん隊長や上級職のクラスになると、週休二日。有給休暇もあるという。もっとも、それらを優雅に使える程、管理職は甘くはないし、フィルの上司達も休みを簡単に求めるような、無能ばかりではない。

休みがないというのも、彼を含む若手組は、仕事が山のように多いからだ。ほとんどが掃除、密偵活動、お茶くみといった、雑事だけど。そうした仕事を通して、警備隊のなんたるかを知る。

そして、発生した事件を先輩や同僚と協力して解決すること一人前になっていく。

そうした仕事を彼は、数年間続けていた。

ここ数年の中の、最年少入隊者である彼にはつらすぎる内容であった。実力が入ったわりに常識が虫食い穴のように欠落していた彼は、主に下仕事に回された。一人前となる技量にはまだ及ばない。

それなのに、砂漠で見つけた水みたいに貴重な休みをこれ以上無くされたら堪らない。

勿論、警備隊に入隊するにはそれ相応の实力が必要とされている。フィルに実力が無いわけではない。経験が足りないのだった。

「じゃあ、その休みを少し伸ばしてあげようか？」

ローテが出す魅力的な提案といったら。

「ああ、俺と一夜過ごしてくれるのか」

性懲りもない、問題発言。毒をくらわば皿までというよりは、失敗した後でぐだぐだになってしまったかのようだった。

ローテは、フィルに手の平を差し出す。

「百万ウート頂戴。それ以下だったら、イアンさんに言い付ける。

『尊敬すべき、そして愛すべき素晴らしい警備隊のフィルさんが、お金で私の貞操を買おうとしてました』って」

「なんで、金を払わなかったら言い付けられるんだよ。普通、逆だろ？」

もちろん彼にそんな大金は持っていない。預金もその半分あるかないかだ。下っ端の彼でも、最低限の給料はでる。けれど、給料日前の食費に悩む程、やり繰りが下手だった。

「言い付けるよ」

非情にも、ローテの言葉が響く。弱みを握った人間が見せるような優越感をひらひらと見せて。

「ごめんなさい、言い過ぎました」

長身の男が小柄な女に頭を下げる図はどうみても、奇妙に見えた。まるで、浮気を詫びるかのよう。実際、ローテはフィルの弱みをさらに握ったけれど。

ちなみに、フィルの名誉のために。彼はそこそ顔立ちがいい。警備隊の一員であるから、体格もがっしりしている。なによりも長身だ。歳もまだ若い。彼がナンパをすれば、宝くじにあたるよりは上の確率で成功するだろう。

だが、そんな容姿も彼女の前には通用するはずもなかった。

「冗談よ」

けれどその顔は、冗談を言っているようには見えないし、聞こえない。

「嘘だろ。なんでもしますから、とりあえずそれだけは言わないでください」

休みを削られる恐怖は、敬語を使うほどまでにあつた。不当労働だつて言うことも出来るが、仲間に恵まれている手前、そんな事は言えない。

それに、辛いながらも、仕事は楽しいのだ。でも、やっぱり休みは欲しい。

「じゃあ、交換条件」

本当は、その言葉を待っていた！　と言いたところだった、口――

彼女は、ぴしつと人差し指を立てた。

「最近の窃盗被害の状況を教えて」

「そんなことか」

ファイルはほつと胸を撫で下ろした。その前の条件は、今思い出しても身の毛のよだつほどぞつとするものだった。

二番隊隊長のカツラ疑惑を説明せよ。

結局、疑惑は嘘だと判明したが、今でも隊長には目を付けられている。

それに比べたら、情報提供なんて軽いものだ。

窃盗被害なんて、ここ最近多発しているから。

「先に言つとくけど、その窃盗の犯人は目星ついてるから」

「子供だろ？　最近、多いらしいな」

警備隊で発表されている、窃盗被害報告書より。その被害者も子供にとられたと証言していた。

「それくらい分かつてんなら早く捕まえなさいよ。ダメ警備隊員」

「それは、賞金稼ぎの仕事だろ」

とはいっても、窃盗の犯人を現行犯で捕まえても、報奨金は、雀

の涙程度だ。彼らが、そんな仕事にやる気を出すはずがない。

警備隊も、割り振りが隊ごとに決められているが、公務以外の仕事は、B級（暴行事件）。A級（殺人事件）。特A（特別指定事件）。といったクラスの事件に関わるのみである。それも、賞金稼ぎと競つてである。窃盗はC級だ。

「目星はついてるでしょ？」

「ついてることは知っている。が……」

歯切れが悪いのには、理由があった。

犯人は、巷をにぎわす、少年ギャングの一員であることは分かっていた。

「カイザーズだ」

「はっ？ なにそれ？」

「知らないのか？」

フィルの問い掛けにローテは頷く。本当に知らなかった。

「少年ギャングだ」

しかし、警備隊が目をつけるほどその組織は小さくなく、子供の集まりだからとさして気にもしていなかった。

賞金稼ぎがつぶしても恨まれるだけだった。賞金稼ぎもそれなりにすねに傷を持っている奴らが多い。純白な賞金稼ぎなんていないに等しいし、逆に賞金首になっていたりする。彼らのようなギャングと懇意にしている賞金稼ぎも多いのだ。無闇に壊滅させたとして他の勢力とも関係がこじれてしまう。

フィルもまた、そのような関係を持つギャングや少年達がいた。

彼も、そのような出自であるし。そして、一番の問題なのがギャングの頭が富豪の子供だということ。

だから、持て余す他なかった。もし理由もなく捕まえたら、圧力をかけられ、息子を帰すどころかいちゃもんつけられて、動けなくなるかもしれない。

だが、金持ちがどうこうという話は、ローテにするつもりはフィルにはない。

彼女は、金持ちを毛嫌いしている。

「アジトはどこにあるか知ってるの？」

「ああ」

「案内してよ」

「何するつもりだ？」

聞いただけ。何をするか予想はついた。

「当たり前じゃない」彼女は獰猛に笑った。

「潰すのよ」

「本気か？」

「やる気満々。潰した手柄は、あんたにあげるわ。そうすれば、休みは増えるでしょ」

平然と言い放つローテ。休みが増えるのは、喜ばしいけれど。

「やめるとか言わないでね。私が誰だか知ってるでしょ？ それに、鞆取り返さなきゃいけないし」

ローテはフィルの手を引いた。

「皇帝を名乗って、こんなちまちましたことしかない奴らに負ける気がしないもの」

振り向いて、フィルに最高級の笑顔を見せた。

最高級の悪意とともに。

「私が誰だか知ってるでしょう？」

2nd：弱みを握られた男の末路（後書き）

ウー ト 西地方の基本通貨。東西南北それぞれ、通貨は違うが価値は同じくらいである。観光記念になることが多かつたりする。物価は、現代日本と同程度。

賞金稼ぎ 事件解決に支払われる報奨金を目当てにする職業。誰でもなれるが、一応組合がある。組合に入ったほうが情報が入るため有利である。正義とはいえ殺人を犯すと逆に賞金稼ぎに狙われる羽目になる。

警備隊 一般の治安組織。事件内容に合わせて班が分かれている。入隊試験が異様に難しい。別の経路でも入隊出来るが、A級程度の事件解決が必要。

3rd：彼らはきづかない、監視する二人

二人の子供が、建物の前に立っていた。

建物、とはいっても廃墟だ。ガラスがはめ込まれていただろう窓枠にはなにもはまっていない。外壁のペンキも禿げかかっている、周りの建物も皆同じ姿をさらしていた。

辺りは寒々としている。栄えていた時は、労働者ばかりで活気があり、煙突が煙を吹いていただろう、工場地帯。だが、それも昔。現在は、一帯がスラム街の様相を表していた。時折の、すすり泣くような木枯らしの風音が寂しさに拍車をかける。

「遅かったな」

二人とも服装がぼろぼろだ。つぎはぎだらけの服は、もう繕えないような破れがちらほらと見られた。

「頑張ったんだよ。それでも」

もうひとり、額に汗を浮かべながら、大事そうに両手に高価な鞆を持っていた。ローテから盗んだ物だ。それは、殺風景なことは場違いに見えた。掃きだめに鶴と言ったとえが似合いそうだ。

ほら、と。手ぶらの子供が手ぬぐいを渡す。

「ありがと」

受け取るかわりに顔を突き出した。

「顔ぐらい自分でふけばいいだろ」

「手がふさがってんの」

「置けばいいだろ？」

「むり。だって」

両手に抱いている物に視線を下ろす。

「地面におくと、汚れるから」

「これが？」

「高いと思うよ。売ったら、しばらく仕事なくていいくらい。だから、汚さないようにしなきゃ」

マジ？ 手ぶらのほうの子供の顔が輝いたが、すぐに疑問を浮かべた。

「だけどよ、手で持っても汗で汚れないか？」

「あっ……しまった！ どうしよう？」

「しょうがないな。おれが持ってやるよ。そのあいだに、おまえは顔ふいてろよ」

ありがとう、と男の子は再度そう言うと、もう一人に鞆を預けた。その交換に手ぬぐいを受け取るとすぐに、顔を拭き始めた。

一通り顔を拭き終えて、手ぬぐいから顔を放すと、目をしばたた。

「さっぱりしたー」

満面の笑みを顔中に浮かべた。その表情は、一仕事を終えたときのそれと似ている。

そうだ。と鞆を持ってきた男の子がズボンのポケットを探る。目当ての物を探し終えると、手を握ったまま、向かい合った二人の合間に伸ばした。

じゃーん。プレゼントを望む子供のように、期待に満ちた効果音を出して、手を開くと。

なんだろう、と不思議に思っていたもう一人の男の子が驚きの声を上げた。

「どうしたんだよ。それ！」

驚いた声に満足したのか、にへへと照れたように笑った。

「郵便屋さんのお手伝いしたらもらったんだ」

手の平に乗っている銀貨が二枚、誇らしげに光っていた。

そのうちの一枚を手にとると、鞆を持つ彼に手渡した。

「あげる」

「どうして？」

銀貨をもらったのは彼ではないのに。

「だって、ばく一人でもってても使い道がないもん。それなら、ポツプに使ってもらったほうがうれしいの」

彼の言葉に、ポップと呼ばれた男の子は、言葉を詰まらせた。何を言おうか？ 素直にありがとう、って言うのも恥ずかしかった。「もっと早くもってこれねえの？」

精一杯背伸びした口調をするた。少年とはまだ言い難い、子供のままで半ば照れながら、年上の真似をする。

「これ以上無理だよ。でも、どれくらいで持ってくればいいの？」

鞆を持ってきた彼も、まだ子供だ。話す相手より額一つ分、背が小さい。だから、幾分彼の方が子供に見える。

「おれが目をつむって」

いったとおりに目を閉じる。

「開けたら。おおっ、よくやった。ってな風に」
すぐに目を開いた。

「むりだつて」

苦笑。いつもの冗談だな、彼は軽く流した。

「おまえの足でも？」

尋ねた方はあくまでも真剣だ。

「じゃあ、ポップも誰かと戦つてるとして、僕がそうしてる合間に倒せるの？」

「やってやるよ、イダテとは違うぜ。俺は」

ポップと呼ばれた男の子は、胸を張った。彼は喧嘩が強いのだ。

「魔術師にも？」

イダテが尋ねる。魔術師とは、ここ数年、街を賑わせている泥棒だ。盗む物も彼らとは段違いに高額な物ばかり、けれどまだ捕まっていない。正体もまだ分からない。性別でさえも。

「朝めし前だぜ。あんなこそ泥なんて」

ポップは自分達の立場をわきまえていなかった。

「そうなの！ じゃあ僕もすぐに盗めるように頑張らなくちゃ」

目を輝かせた。

「頼りにしてるぜ。お前の足は、大人でもかなわないんだから」
両手で、イダテの両肩を景気よく叩く。

だけど、イダテは浮かない表情を浮かべた。彼の顔を見ないで、俯いた。

「イダテ？」

「これでよろこんでくれるかなあ？」

怖ず怖ずとポップを見上げる。その顔に不安に満ちて溢れる。

「大丈夫だつて。大物だろ？ きつとほめてくれるって」

景気よく言ったつもりだった。けれど、堅さの残る声。それで、イダテを安心させられない。

「だけど……」

言葉に詰まる。

「とにかく、いつてみようぜ」

打ち消すように。ポップは不安そうなイダテの肩を支えるように、建物の中に入っていく。

眺める人影は気付かれないままに彼らを監視する。

.....

「あの子だ」

ローテは、彼らから遠い距離、建物を二つ挟んだ所、工場だった場所の屋上から、双眼鏡を覗いていた。

「へえ、あの子がねえ。あんなに小さいのか」

寝そべりながら、答えるフィルは裸眼で眺めていた。ふざけているのか、両手を丸めて目に当てながら。

「これで見えてるの？」

「いや」

「じゃあ、暢気に寝そべるな」

ローテは突き刺し、地面に縫い付けるかのごとくフィルを足で踏み付けた。

「へっ。そんな攻撃、いつもの訓練に比べっ！？」

転がりながら避けたはいいいけれど。

手摺りに派手にぶつかつた。

錆び付いたそれが、残像を残しながら震える。

建物の屋上だから、もし手摺りがなかったら、真つ逆さまに落ちていた。痛み分けというところ。

「いつてえー」

背中を丸めて悶え苦しんだ。

「天罰よ。まともに働いていないから」

「まともに働いてるぞ、いつも」

「イアンさんのお茶に雑巾の残り汁をいれてもそういうの？」

「違う、俺がいれたのは唐辛子をしゃもじ一杯……って何言わせてんだよ！」

「へえ」

意味ありげにフィルを見下ろした。彼は黙っていても弱みを見せてくれる。

「えと……何も考えていませんよね？ ローテさん」

立ち上がって、恐縮したように、年下の女の子に敬語を使う警備隊の一員。かなり、情けない。他人に見られていないだけ、救いがあつた。「とりあえず。あの子達から潰すとするわ」

そんな態度の彼を無視して、ローテはひとまず作戦を立てる。警備隊の弱みを握っている場合ではないのだ。

人差し指を口に当てるのが彼女の癖。切手の裏のように、指を舐める。

「で？」フィルがその先を促す。

「中のギャングも一網打尽に捕まえる。だめだったら助け呼ぶから」

「一人で行くのか？」

「だって、やっぱ賞金もらいたいし。結構もらえるんでしょ？ でも、手伝ってね」

たとえ、子供達の集まりといえど、犯罪行為を行うような集まりを潰すと賞金は殺人犯を捕まえる程度である。かなり多い。

「金の亡者め」

勿論、ローテに聞こえないように、フィルは言った。彼は、あまり乗り気ではないようだ。

「お前はどうかんだ？ 他のギャングと繋がりがあるのか？」

「別に私はギャングとはしがらみないし。どっちかっていうと、嫌われる方だしね」自嘲するように、赤髪を手に巻き付ける。

「むしろ、むかつく。徒党組んでしか行動できないヘタレだし。何にも出来ない癖して、態度でかいし。それに……」

突然、ローテは口を閉ざす。

「どうした？」フィルの問い掛けに、ゆるゆると首を振る。

「なんでもない。それで、手柄はフィルにあげるから、お金もらえるように手を回してよ」

「お前って案外、金に執着するよな」

ほんの軽い気持ちで言っただつもりだった。

「あんたには、わからないわよ」

突き放したような言い方。氷をそのまま力強く突き立てたようだ。慌てるでもなく、ただ必死さを言外にフィルは感じた。

「ごめん」

すぐにローテは謝る。彼女にしては珍しかった。

「気にすんな。お前らの事情を考えられなかった俺も悪いから」

「ああ、」ローテの口調の歯切れが悪い。

「で、やばくなった時の合言葉なんだけど『月と太陽』それでいい？」「いいけど。お前って、本当にあいつら好きなんだな」

「弟と妹だもん」

彼女の弟と妹は、それぞれ月と太陽に由来した名前を持つ。

「最近、悪戯ばかりしててさそれが、また可愛いんだ。驚かせようと思ったけど、先に懲らしめようって思いついたの。今日買った鞆も持ち合わせが足りなくて、貯金をくすねたくらい」

「犯罪だな。窃盗罪で逮捕してもいいぞ」

「今から、盗んだ奴を懲らしめるのよ。フィル」

4 t h：集団で孤立する二人

渦を巻くように、煙をくゆらせる煙草、蒸せるような強い匂いが
廃工場の内部に充満していた。

その中で少年達が円を組み、地面に足を崩して座り、手元にある
手札を凝視する。賭けトランプが彼らの中で行われていた。

彼らの頭は派手に彩られる。着ている服も、皆が皆、眼がちかち
かする配色。服装は乱れ、それを良しとする雰囲気だ。

その中の一人が入って来た二人に気付く。

「おう。遅かったな」

派手な彼らの中で一段と際だった金髪の少年が目線を動かした。
その口調は不機嫌を隠さない。撫でるような金属音が聞こえ、鉄パ
イプの束の上に座っている状態から立ち上がった。

この集団のリーダー格。それを証明するかののように、いつそう派
手な迷彩柄の服を身につけていた。

でも、お世辞にも似合っているとは言い難い。

「ちよつと、手間取ってしまいました」

イダテは答えた。敬語なのは、彼が恐いから。以前、打ち解けた
口調で話したら、彼が気の済むまで殴られたからだった。

「何、手間取ってんだよ。役たたず」

鉄パイプに蹴りを入れ、それが、音を立てて崩れる。恫喝するよ
うに聞こえるやかましい音にイダテは肩を縮めた。

「テメエ、誰のおかげでここにいられるのか分かってんの？」

イダテの足がすくんだ。威圧感よりも、彼自身が怖がっていた。
むやみに怖がるイダテを見て、少年達はおもしろがっていた。

ポップは、どうしようもなくなったイダテの前に立ちはだかった。
もう、これ以上見ていられない。

「これを見てくれよ」

ポップはイダテから鞆を奪い、少年に示した。

「これか」

少年は、ひつたくるように鞆を持ち去った。舐め回すように底から、上から、眺める。

「高そうじゃないか」

これ位のものを盗むのが当たり前だ。と、言外に匂わせる。

けれど、その言い草とは真逆に、少年は満足そうにうなずいた。

「ありがとうな」

今まで聞いたことがないような猫撫で声で発せられる褒め言葉に思わず、イダテは信じられないとでも言うように、少年の顔を見つめた。

「これ、彼女にプレゼントするわ。前からあいつが欲しがってたやつだし」

えっ？ イダテの顔が曇る。プレゼント？

「売るんじゃないんですか？」

思わず、尋ねてしまう。言ってから、しまったと口を閉じた。

けれど、発した言葉は取り消せない。

「どうして売るんだよ！！！」

少年の怒鳴り声が響いた。顔が怒りにねじまがる。額に青筋がたつていても、鼻から湯気が出始めても、おかしくはない。

「物を得るか売らないかは俺の勝手なの！　っ何か何！？　俺の決定にケチつけんの！？　お前いつから、そんな偉そうな口聞けるようになったわけ！」

彼の突然の剣幕にイダテもポップも言葉を発せない。逃げ出そうとしても地面にくっついたまま、足が離れない。嵐を避けるように身体を縮こませることしか出来なかった。

「許せない」

少年は興奮覚めやらぬまま、ズボンのポケットから、それを引き抜いた。

真っ黒い害虫のように光る、拳銃。

少年はためらいなく人差し指に引き金を掛けた。ポップは見た。

撃つ気だ。

「待てよ！」

慌てて、再度彼らの間に立つ。「また、同じくらのもんぬすめばいいんだろ」

言い終えたその時に、頬が熱くなった。ぶたれた。地面に倒れ込んだ。

ポップは殴られた頬を触り、よろよろと立ち上がりながらも少年を見上げた。上目使いで睨みつける。端から見れば、反抗しているように、見えるように。

なら、お前がやれよ。とポップは毒づいた。もちろん心の中で。あんたみたいな、孤児じゃなくて金持ちの息子で悪ぶりたいだけの野郎なんて大っ嫌いだ。

ポップのその態度を見下ろしていた少年は、またしゃくに触る。

「てめ……」

「ごめんなさい!!」

少年が怒鳴りかける寸前で、イダテが謝った。ポップのそばで、彼が立ち上がるのを手伝う。

「もっといいもの持ってきますから……。だから、許してください。ほら、ポップも」

イダテは無理矢理、ポップの頭をつかんで、地面に近づけた。

二人は、揃ってひざまずき、許しを請う。そうしなければ、もって酷い目に合わされるはずだった。

なんでだよ。ポップはイダテに納得がいかない。愚痴の一つくらい言いたかった。

けれど、出来ない。

わしづかみにするように髪の毛を掴む手は震えていたから。必死に謝る声にもうこれ以上、火に油を注ぐ真似は出来ない。

「次、失敗したらただじゃ済まないからな」

別に彼らは失敗したわけではないのに、捨て台詞を吐くと、少年は乱暴に鞆を扱って、元の場所に帰っていった。

イダテが大切に扱ってきた鞆をぞんざいに扱われ、まるで彼の仕事が無下に扱われているみたいでポップは齒を噛み締めてまだ治まらない怒りを押さえた。

「いいんだよ」

あきらめたようにイダテはうなだれる。

何がいいんだ、そうポップはそう言いたかった。けれど言えない。微かにでもそれを口にしたら彼らにやられる。彼自身、もそうだ。一人一人を相手にすれば倒せる可能性も無きにしもあらず。けれど、失敗する確率が高い。そのうえ、この場合は数人に対して。勝ち目はないことはわかっていた。

こんな奴らを屁にも思わないくらいに、ポップは強くなりたかった。

イダテにも迷惑をかけているし。こいつは、一生懸命やってんのに。

「ごめんな。イダテ」

だけど、それは何に對しての謝罪だろうか？

不様に土下座をしてまで謝ったイダテに對して？

盗んだ鞆の分のお金を貰ってないから？

全てがイダテに向けての謝罪しか考えることが出来なかった。

だけど、彼に落ち度はあるだろうか？

やり場のない訳の解らない気持ちにポップは戸惑った。

「これからどうしよう」

独り言のように不意に吐き出された一言を聞き、ふと我に帰った。

イダテは放心したように、目線を宙にさ迷わせていた。

「ひさしぶりの大物だったんだ。持つてる人もぬすみやすそうで、これ以上なかったのに」

虚ろに響く声は据わらない。「これ以上なんて滅多にないのに、無茶だよ」

イダテの独白は止まる気配を見せなかった。

「イダテ？」不穏な空気を悟って、ポップは呼び掛けた。

その声が届いたのか、イダテは力無くポップを見返した。

「ごめんね、ポップ」

「なに言ってるんだよ！ イダテ！」

うなだれるイダテの肩を、元気づけの意味も込めて力強く掴む。

「また、頑張ればいいだろ！」

「頑張ってる！」

怒鳴り返したその声は投げやりだった。

「だけど、頑張るだけじゃダメなんだ」

そう言つと、イダテは肩を握るポップの両手を力無く振り払う。

立ち上がり、幽霊のようによろよろと歩いていく。

「イダテ？」

問い掛けた言葉は、震える背中を振り向かせることは出来なかった。なすすべもなく、ポップは見送るしかなかった。

5th：捕まる彼、捕まえる君

たまり場を抜け出し、外を歩きながら、イダテはとても落ち込んでいた。肩を落として、俯いた口からため息を何度も無意識に吐き出す。空気がなくなっても、おかまいなしに。

ポップが必死にフォローしてくれたのに、ただ怖がる事しか出来ない自分に向かって。それなのに、ポップに八つ当たりするように怒鳴ってしまったことに対して。自分自身が情けなかった。

ポップのように強くなりたい。せめて、脅かされても普通に口答えして軽く受け流せるように。

ポップは足が速いじゃないかと、イダテの長所を誉めてくれる。けれど、結局は逃げてるだけを取り柄なんだって思えてしまう。欠点だ。

ポップはイダテが盗むときも、彼よりも年上の人たちに脅されたときも、逃げだせるのに、知らんぷりできるのに、そうしないで彼を守っていた。

だけど、いつまでもポップに頼ってられない。しかし、イダテがいくらそう思っても。いつも、ポップに頼ってしまっていた。どうしよう。ポップ、怒ってるよね。

イダテはため息をまたついた。適当に歩いてたつもりなのにいつの間にか、公衆便所の入り口に立っていた。彼らのように身寄りのない子供達や、貧しい人しか使わない場所だ。落ち込んだ時にイダテはいつも何があろうと、この場所に自然と足が向いていた。個室を閉めてしまえば、誰にも見られずに泣くことができる。滅多に人が来ない場所だった。

いつものように、足を踏み入れようとして。

「……！！」

口を塞がれた。視界の下端に黒い皮手袋がのぞく。滑らかな不気味さが唇を撫でながら、首筋に冷たい感触が走る。

まるで、金属のように温かみがなくて、薄く撫でられるような感覚は、刃物のような。

「動くな。抵抗したら、わかるな？」

中性的な声。人ではないように平坦で、氷を張ったように静かだ。イダテは動けない。暴れようにも身体が強張っていた。何とか抵抗しようと身体を動かそうとする。けれど、型にはめられたように固まったままだった。

首筋をはっていた冷たい感触が消える。安堵したのも束の間。視界が閉ざされた。なにも見えない。鼻筋が締め付けられてようやく、イダテは目隠しされたことに気付いた。

「動け」

短いけれど、命令に慣れているかのように、服従者に絶対だと思わせるような言葉。

イダテは命令されるがまま、ひっぱられるように、歩いていく。きいい。たてつけの悪くなった扉の音が聞こえた。個室に入ったようだ。

握っていた両手を腰に回されて、身体を反転させられる。両肩を押さえ付けられ、無理矢理座らせられた。紐のようなもので両手を縛られて、動かないもの、多分、排水管に繋がれた。

豪雨のような、水が溜まる音が遠くから聞こえて、不意に首筋に当てられた感触がまた消える。ちゃぷちゃぷと水が跳ねる音が近づく。鍵が閉められると同時に、頬を叩かれた。

「口を開ける」

言われるがままに口を開ける。昆虫とか、その類が口に放り込まれたらどうしようと、不安になったが、実際そうしないと何をされるかわからなかった。

そんな不安を心配することはなかった。一枚の紙のような布が口の両端に触れる。口腔にねじ込まれるそれがくすぐったい。

「噛め」

乾いた布に唾液が染みるくらいに力強く噛む。意外と厚く、甘い

味がした。

「抵抗するなよ」

言つとおりに従うと、ボタンが外されてシャツとズボンを脱がされた。下着から冷たい風が素肌に突き刺さる。寒い。

別の恐ろしい想像がイダテの背筋を撫でた。この人は変態だ。ポツプに聞いたことがある。いやらしいことされるって。それを想像して、縮こまる身体をさらに強くこわばらせた。

でも、何も起こらない。じつと見られているような気配しかしない。鼻から、いい匂いがくすぐった。妙に鼻につく、嗅いだことのない匂い。

「待たせたな」

どのくらい待ったか分からない。物音が、がさごそと聞こえた。

「歯を食い縛れ」

忠告されるがままに歯を食い縛る。

「?!」

歯が抜けてしまうような重さが布にかかった。

「離すな」

叱咤されて、どうにか持ちこたえる。それでもつらい。歯がごろりと抜けてしまいそうだ。

「いいか、お前がハンカチを離したら、その勢いで上から」

今までから打って変わったような猫なで声。まるで、楽んでいるかのように。

「ナイフが落ちて来て、頭を貫く」

冷水をかけられたようにひやりとした。

「死にたくなかったら、助けられるまで待つことだな、もっともこほんと咳払い。「誰が僕を助けにきてくれるのかな」

最後は誰だか見当もつかない男の子の声を発した。

両端から、少しずつ音が上がっていく。蜘蛛のように動いて、扉を乗り越えるみたいだ。けれど。

「ああ、そうだった」

靴底が擦れ、地面に音が降りてきた。

「最期の言葉を聞き忘れていた」

噛み締めていた布の両端に、両手が握られた。

「口を開け。話している間は楽にしてやる」

半信半疑で聞いていた。もちろん、口を開かない。安易に布を離し、間拔けに死ぬのは避けたかった。

強情な奴だな。その人はそう漏らすと、両手で布を力強く引つ張った。唇が擦れてしまいそうだ。「これで安心して放せるだろ」

その人が本気だつて分かった。イダテは、安心して口を開く。顎がぐくぐくと震える。そう思っているなら、まだ生きている証拠だろう。

「ちよつと、重いな。前言撤回しよう。三十秒以内な」

「早過ぎませんか？」

「それでいいんだな」

「ちよつと待つて」

自分で言っておいて、適当に終わらせかけたのは酷い。でも、何を言えばいいだろう？ ほら、あと十五秒。と急かしている様子を聞けば、本当に時間が限られているようだ。

「どうして、一気にころさないの？」

「ほえっ？」と合間を突かれた声をあげたからには、予想外の出来事だったのだろう。三十秒つて自分で言った割には、もうその時間は過ぎていた。

「殺さないかつて……」

本気で悩んでいるようだった。

「ころすなら、そんな回りくどい方法じゃなくていいじゃないか。それじゃなくても、ぼくは死んでしまいたいのに。足手まといにしかならないのに」

役立たずで、友達にも迷惑をかけてしまつ。自身がいなくなつたら、ポップは悲しむかな？ 酷い僕の事を悲しんでくれるかな？

どちらにしても、彼は僕がいなくなつて楽になるに違いないはずだ。

「死にたくなつたら死ねばいい、ちょうど私がお膳立てを立てたのだから」

「だけど……」

死ぬのは怖かった。口から放したとき、ナイフが頭に刺さる光景を想像して、身震いした。我ながら、情けない。だけど、

「直接殺さない理由は、私がすごく怒っているからだ。復讐だ。恐怖感を骨の髄まで味わうがいい。それに、わざわざ『死にたい』とかいう奴をすぐに殺す必要なんてないからな。人間、死ぬときは死ぬんだ」

だけどと、そう言おうとして。もう終わりだと、言われる。

「あなたは、だれ？」

答えないと思った。

「ただのしがない賞金稼ぎ。またの名をフィル・アクイスという」
本当ですか、と尋ねる前に布を口元に突き付けられる。「早くしてくれ、もう限界だ」間もなく、口にそれをくわえた。

フィル・アクイスと名乗る人物はそれっきり、気配を消した。

イダテは、個室の中、完全に一人ぼちになる。

食いしばる歯を緩めば、彼は死ぬことができるのに、そうする決心がつかなかった。

ポップが決めてくれるのかな、とイダテは漠然とそう思った。

6th:そして、彼女がやってくる

イダテが戻らない。

不安を感じながら、ポップは彼を待ちわびた。目を皿のようにして、入り口を見つめる。いつのまにか、貧乏揺すりを始めていた。自然とその間隔が短くなっていく。

瞬きをした、その一瞬に人影が現れた。

まるで、煙のように。

「イダ……」

彼の名をいいかけて、やめる。彼とは、似ても似つかない体格の少年だった。ポップにはなじみのない顔だったが、彼はここにくる全ての人間を知っている訳ではない。

少年はポップを一瞥すると、そのまま少年達の溜り場に向かった。誰もが取るはずの行動だ。そこが中心だから。足どりも、背筋も堂々としていた。

だが、ポップは違和感を覚えた。彼の足は、微妙に少年達の方角を向いていない。イダテが盗んだ鞆に足が向いているように感じられた。

ポップの予想は当たる。少年は、鞆の目の前に立った。

何かが、変だ。

「おい！」

突然叫んだポップを皆が睨みつけようとして、異変に気がついた。少年たちが眉をひそめて、足元の鞆を見つめる少年を見つめていた。

「どうした？」

リーダー格の少年が威嚇する。「てか、お前誰？ 見ない顔なんだけど？」

少年は、鞆から少年のたまり場へと視線を移す。誰もが、怖じ気付くはず。少年の権力が恐ろしいから。けれど、堂々としている。

彼の事が怖くない。彼は態度で示す。

白砂が流れるような沈黙と静寂が場を包んだ。

「ははっ、あははあ」

それを破ったのは、鞆の近くにいて、少年。狂ったように笑い始め、心底おかしそうに身体をまげて、腹をよじった。

少年たちも、ポップも狂気に触れたかのような彼の態度に戸惑った。どうしたんだ？ こいつは？ 誰もが行動を見せない。

「ははっ。こんなんがギャング？ チマチマしてて、馬鹿みたい。

少しびびってただけ。大丈夫みたいね」高笑いの余韻か、少年は、一氣にまくしたてる。「こんな臆病者^{チキン}達なんてひとひねりだ」

誰なんだ。こんなに堂々と言いたい事言うような、狂ったように笑う奴見たことなかった。

それに、なんだろう？ こんな屁ではないとでも言いそうな笑い方。女つばい喋り方も含めて、今まで一度も彼の耳から入った事がない。

「まあさ、とりあえずそれ返して」少年は盗んできた鞆を指差した。
「駄目に決まってるんだろ。ばーか。これは、皆の物だ」

少年が言ったのは建前だ。金は少年と彼らの取り巻きが大部分を奪い取る。

「それ、私のなんだよね」男声ではない、女声。「あんたらの物じゃない」

気が付くと、少年は鞆を手に掛けていた。遠目から見ると、彼が盗んだ物と瓜二つに見える。

「ほらこの通り」少年は腕を上げてそれを誇示する。彼らを嘲笑うかのように、鞆が揺れていた。

「いつのまに？」

誰もが驚いていた。彼が動いた所を見ていない。けれど、鞆は彼の腕の中にある。手品を見せ付けられたかのようなうだ。けど、種はまだ見破れていない。

「どこ見てんの？ 目の前見てみたら？ こんな偽物に決まって

る」

少年は、また高笑いを響かせた。

確かに、彼が盗んだ鞆は少年達のすぐ近くに置いてある。まだ、盗まれていなかった。

「高価なものと、そうでない物の違いもわかんない癖に、当然のように取り扱うな！　ばあーか！」

「てめえ……」

少年達は、怒りを隠さなかった。けれど、その怒りようは端から見れば、馬鹿の二文字に反応したからとも受け取れた。

「誰だ、お前？」

驚きすぎて、他に出る言葉が見つからない。

少年は、少しの間をおいて答えた。

「誰でもない誰か」少年は自身を指差す。「だけど、あんたらとは初対面だ、私は」

そういうと、彼の身体が隠れた。粉をまぶしたような煙が彼を包みこみ見えなくした。

煙は、出口を求めて外にでていく。段々と晴れていく視界には、直前とは似つかない姿が写し出されていた。

少年達が息を呑む。ポップからは、うなじまで流れるような赤い髪。癖毛もないストレートのそれが肩にかかるかどうかの程度まで伸びている後ろ姿しか見えない。

紅族の女の人だった。イダテに鞆を盗まれた、ローテである。

民族の特徴をそのまま受け継いだ美貌。薄い素材だろう、上着は均整のとれた背中形の形に沿って延びていて、腰の辺りでくびれていた。そんな、スタイルの良さを隠さない。ジーンズを穿いた下半身は、引き締まったお尻からすらりと伸びた両足が色つぼさを際立たせている。まだ子供であるポップも唾を飲む妖艶さが漂っていた。

「じゃーん」ローテは、つまらなそうな効果音を口にする。

「誰だ。お前」

下品さを際立たせるように少年が尋ねた。醜く笑う。身体が自然

と反応をするような、醜悪な妄想をしている事は一目瞭然であった。舌なめずりをして、溜まった唾をぴちゃぴちゃと音立てた。

「名乗る前に自分から名乗れって教えられなかったの？」

見下したように、冷たい口調で彼女は答える。プライドが高そうだ。貧民なんて見向きもしないような、むかつくお嬢様みたいだとポップには思えた。

「無理かな？ 不良だし」

冷たく、突き放したような口調に、少年達がいきり立った。

「それに」無視して、ローテは回りを見渡す。「素顔見せちゃったし、この集まりも今日でおしまいね。私が潰すわ」

冗談のように、ファイティングポーズを構えた。

「どっからでもかかってきなさいよ」

「舐めやがって」

舌打ちをして、リーダー格の少年は懷から拳銃を取り出した。片手で握りしめたその銃口を彼女に向け、構える。

嘲笑うローテ。「安全装置も解除しないで、狙い定めてんの？」

もしかして、懷に入れていた時から解除していたの。だとしたら、すごい度胸ね」

知り合いの警備隊の隊長もしないのに。

彼女はそう言った。

明らかに馬鹿にして。

少年が安全装置を解除してすぐに撃つまで時間はかからなかった。たったそれだけのため十分な理由となるほど、彼女の行動は彼を逆上させたし、彼の沸点は真夏の暑さくらいに低かった。

発砲音。それは、飲み物のふたを開けるような安く、軽い音のように聞こえた。

静まりかえった工場跡に聞こえた悲鳴。金属を耳元で引っ掻くような不快なそれが聞こえたのは、間もなくしてすぐの事だった

7th：無謀の代償

「あつ　くう、あぐ、あああああつ」

ガラス片に、爪痕が残りそうなるうめき声。ローテは膝を押さえて崩れ落ちた。身体を赤ん坊のように丸めて、うずくまる。

膝からは、ポップの位置からでも見えるほど朱に染まっている。

紺色のジーンズを鮮やかに染めるのにも飽きたらず、それが地面を濡らした。

「はっ、でかい口叩きやがって」

勝ち誇ったように叫ぶ少年。銃口を吹き消すような仕草をみせた。しまわずに手元に握ったまま。

「たっ、たま　たまの癖：し、て」

「おっと。まだ減らず口を叩いていいのかな？　××××」

少年は、絶対に言っではいけない言葉を吐いた。特に、紅族に対して。

「お前の運命は、俺が握っているのにねえ」

少年の粘着するような言い方に、ポップは嫌悪感を覚えた。

さつきまで怖じけづいていた癖に。

「ハッ。あ、んた　みたいな奴が：いって　も、様にな：　あ

あああ！」

減らず口を叩く彼女に、少年は静かに近付くと、血にまみれた膝を思い切り踏み付けた。

悲鳴が歯ぎしりに変わるまで執拗に続けて。

「ねえ。そんなにでかい口叩いていいの？」

足を地面に戻す。ローテは答えられない。うずくまった身体をさらに丸め、膝にくる激痛と戦っていた。悲鳴を上げた分だけ呼吸を奪われる。息が荒々しく、苦痛に歪む顔が、のどを突き出して、少年の目の前にさらけ出された。

「ぐうう」

「

息を吸い込む合間に呟く声に力はない。

「紅族の女って珍しいよな？　しかも、高価なんだってな。親父が言ってたよ。御偉いさんしか、『飼えない』って」

歌うような少年の言い草に、ローテは答えずに黙っていた。しかし、その瞳に微かに憎しみが宿る。

例え紅族が迫害されていたとしても、自分が紅族である誇りは捨てない。それが、紅族の矜持。

そんな事は、生きていく事だけしか考えてこなかった、ポップでも知っていた。実際、彼はそれを通す彼らを尊敬の眼差しで見上げていた。

そして、自分達の一族が馬鹿にされる事は、紅族にとって、屈辱以外の何物でもなかった。

もちろん、その性格を少年は知っていたわけで。

だから、彼女をなぶるために、それを利用した。

「自分がこの種族に産まれてきたのを後悔してるだろ？　なあ、そうだろ？」

少年は、拳銃を持たない手でローテの顎を無理矢理に持ち上げるのけ反るような体勢になり、斜めになった視線を通じて、二人は目があつた。

彼女は決して目を逸らそうとはしなかった。こんな奴に屈しない。そう宣言するような、赤色の色素が強い双眸が意思を物語る。

少年は、その意思を潰したい衝動にかられた。鼻っ柱が強い奴ほど折れた時にぐずぐずになって、そして壊れてゆく。

彼女の答えは、やはり否だった。

予想の範囲内。

「……………あんたに、何が分かるの？」

息を詰まらせながらローテが吐き捨てる。

「ああ、知ってるよ。あんた達は、男も女も慰み者にされるんだよ。だから」

勿体振るように、一息おいた。ここまで言えば、次の言葉は、誰

でも予想できる。ローテの顔が歪んだ。まだ、一通りの経験は済んでいないようだ。

あと、もう一息。少年は、心の中で醜く笑った。

「お前も、俺達に犯されるんだ」

やめて、と力無く答える彼女の表情。青ざめ、屈辱に塗れながら、恐怖に微妙に逸らされる視線が、さらに少年の感情をそそった。

「どっちみち、お前に選択はできないよ？ 大丈夫だって、俺達で優しくもてあそんでやるよ」

そう言いながら、顔つきは、邪悪そのもので、今まで黙っていた取り巻きも一斉に唾を飲んだ。

「い、嫌だあ」

ローテは、少年から逃れようともがいた。けれど、逃げられない。「なんでもする。なんでもするから……」。だから、お願い。それだけは……」

今まで強気に出ていた、その瞳が潤み、縋るように少年に近寄る。濡れた瞳に微かな恥辱を垣間見せる。こんな男にと、屈辱を隠さないように、口元をひくひくと痙攣させた。段々と彼女が壊されていく。

「本当は、やりたくてたまんねえんだろ！ この雌豚が！」

少年は、弱々しく襟元をつかみ、胸元を見せないようにしていたローテの両手をわしづかみ、力に任せて押し倒した。

精一杯、けれど鳥籠に押し込められた雛のようにしか抵抗できない彼女の衣服彼の手でが乱され、ほのかに薰るような、薄紅色の素肌が見え始めた。上着のボタンが争ううちに外れ、膨らみが見え始め、彼女が言葉にならない悲鳴を出し続けた所で。

やめろよ。声がした。

少年と取り巻きは、声の方向に視線を向ける。

ポップが手を震わせ、睨みつけていた。

なんだよ。と少年が不機嫌な声を発する。後、もう少しなのに、と邪魔すんなど。

「なんで、この人にそこまでしなきゃいけないんだよ」

盗まれた鞆を取り返しにきたのなら、素直に返せばいい。ここまで来る。そこまでの理由があっただろうから。

もし、イダテだったらそうする。イダテが盗んできたものなのだが、イダテが好きなようにすればいい。

だが、何もしない少年達がえびり散らしているのが気に食わなかったのと。

無力な女の人に向かっての卑劣な行動に怒っていた。自称、喧嘩っ早い、ポップでも、決して自分よりも弱い者には、今まで一度も暴力は振るわなかった。

だから、弱い者に向かって当たり前のように脅している少年が気に食わなかった。

何が、ギャングのリーダーだ。

ただ、金持つてるだけの野郎なのに。

「うるせーよ」

気だるげに言った少年の手には、拳銃。今まで、ともに撃ったことがなかった彼は、彼女に銃弾を当てた事で、気を良くしていた。当たるのが当然と言うように、ポップに狙いを定める。

ポップの体が強張った。さっきので、拳銃の威力を知ってしまったから。恐怖心が心の中に満ちていく。口答えをして許してくれるはずがない相手だ。

このままだと撃たれてしまう。

だけど、どうすることもできなかった。

少年が引き金を引こうとしたその瞬間。

少年の胸元に今まで弱々しく抵抗していたローテが釣りにかかった魚のように食いついてきた。そのまま、上下の体位が逆転する。赤い髪が、少年の首筋に枝垂れかかった。

その勢いで上着を止めていたボタンが全て外れて、上着が羽衣のように腰に纏わり付く。下着だけとなった彼女の上半身が寒空の中で匂う。柔らかい二の腕を首に回し、少年に身体を重ねた。

抱きしめられた少年に身体を動かす自由はなく、彼女の素肌が少年に密着する。潰れた胸の何とも言えない感触が、少年に喜びを与えた。

耳元では、囁くように、ピンク色の煙に閉じ込められたような、なまめかしい喘ぎ声が聴覚を刺激する。羞恥からか、彼女の身体は細かく痙攣していた。彼らの身体が小刻みにくつつくことに、隙間から追い出される甘い香りが少年の鼻に吸い込まれる。

少年は、何も考えられない。周りに人がいることも、自分がなにをしているのかも。ただ、天にも昇るような心地良い気分の真っ只中にいた。

経験は何度もあるのに、こんな体験は初めてだ。しかも、飛び切りの美人だ。紅族の。

彼女はおもむろに、少年の首にかかった両手を離す。彼にのしかかる事をやめ、右脇にのいて彼と垂直に正座した。地面に手をついて、ゆっくりと上半身を反らせる。

年の割りに発達した胸が、下着によって膨らみを制限されていた。それでも、触ってくださいと言っても言うように、少年の真上で胸だけが迫り出していく。上気した呼吸のせいで、盛り上がるそれが別の生き物のように、ふるふると動く。

彼女から解放された彼は、もちろん拳銃を手放して、上半身を起こし、その誘いに乗ることにした。体を回れ左する。まるで、宝物に触るかのように、膨らみにおそろおそろ手を伸ばす。

世に言う青春時代真っ盛りである、少年にとってこれ以上ないご馳走だった。だから、それ以外全く目に入らない。少年は二人だけの世界に埋没していた。

ポップは、黙ってその光景を見ていた。拳銃を向けられていた、つい先程までの恐怖が抜けきらないまま。二人の行為を眺めていた。美人である彼女の行動には、まだ子供である、彼も思わずぞくりと、鳥肌が立っていた。けど、その行動はポップを守るためのような気がして、申し訳なさ、やる瀬がなかった。

彼女がおもむろに、背を逸らすとき。彼女の顔は、ポップに向いていた。

髪の毛が逆さまに垂れて、段々と彼女の顔があらわになって。ポップは更に鳥肌を立てた。

逆さまに垂れ下がった女の人の顔が。

凄惨な表情で笑っていたのだった。

ポップにしか見えない。

8th：逆襲

少年の指先が彼女の胸を触る、まさにその直前。

少年は宙を舞う。

頭を中心に天に半円を描き、背中から地面とぶつかった。

かは、っと肺に溜まった空気を一度に吐き出し、大袈裟に呼吸をくりかえす。背中から広がった痺れに少年は動けない。

「残念でしたね、お坊ちゃん」

慇懃無礼な態度の彼女。さっきまでの屈辱に耐えた表情をがらりと変えていた。「全然、實力不足」砂埃をはらうように、両手をはたいた。

少年の手首を掴み、彼女を支点に投げ飛ばしたのだった。その間に、上着の裾がだらしなく外にはみ出てはいるものの、神業ともいえる早さで服を着直してもいた。

「…な…な…んで？」

少年が息も絶え絶えに、疑問に思うのも当然で。

彼女は平然と立っていた。拳銃で足を撃たれ、血が地面に水溜まりを作るほど、出血が激しかったのに。泣き顔を見せて、ぶざまに許しを願っていたのに。

ああ、これ？ 彼女は打たれた箇所を触る。痛がるそぶりを見せなかった。

「私が撃たれる訳無いし。それに、あんな、ど下手な撃ち方でどうやって当てるのかしら？」

しゃがみ込み、指ですくった血を、少年の瞼に線を引くように塗りつける。

少年の反応は明らかだ。すぐさま奇声をあげて、顔をしかめ、身をよじって苦しんだ。蜘蛛の糸を引き寄せるかのように、宙空を引っかいた。

「赤トウガラシ水に決まってるじゃない」

彼女の声はあくまでも、冷やかに。

「全部、演技よ。知ってる？ 絶望ってさ、幸福が長く続いた時を知ってれば、知ってるほど深く苦しくなるって？」

辛さが目に染みて、苦しむ彼は答ええない。苦しみを両手に移すかのようにやけくそに叩いていた。

仰向けに転がる彼を跨がり、彼女は見下ろした。

赤トウガラシよりも紅潮した、少年の顔に自分の顔を近づける。

「あんたに、私の何が分かるっていうんだ。偉そうに講釈するんじゃない。てめえみたいな、中途半端に気取って悪さする奴らが大っ嫌いなんだ。私は」

その声は、囁くように、低く抑えられていたから、ポップ達取り巻きには全く聞こえなかった。

だから、「もっと派手に悪さしてみれば？ 私みたいに」なんて口走った事は、もっと小さかったから、彼女以外に聞こえない。

彼女は言いたいだけの事を言い終えて、鞆の下へと歩を進める。

一、二歩目で、わざと少年の股間を強く踏ん付けた。まだ、固い感触を残していたそれを。

少年の悲鳴がまた際立ったのを気にせずに、彼女は鞆を難無く奪還することに成功した。すぐに、傷がついていないか確認する。特に目立った傷はついていない。久しぶりに手元に戻ったそれにほお擦りしたくなったが、自重した。床に再度置いておく。

そのかわりに、まだ倒れている少年の元に戻って、彼が持っていた拳銃を奪い、喉元に突き付けた。

「ここまでやって、誰も助けに来ないって事は、彼によっぽど人望がないって証拠になるんだけど。でも怪我したくなかったら、動くな。あんただけでも、人が間近で死ぬのは見たくないでしょう？」

取り巻き達は答ええない。彼女のあまりの様変わり様に、言葉を失っていた。

それに、このような状況で行動できる、肝っ玉のある人間はいなかった。

ローテは言い終えると、少年の腹の上に椅子に腰掛けるように、ためらいなく座った。彼の口から空気が残り少なくなった中身をさらに搾り出すかのように吐き出される。

案外、彼女は重いのもしれない。

「まあいいや。私は、君とサシで話がしたいんだ」

ローテが今までの仕業がなかったように柔らかに言う。指さした先にはポップがいた。

彼は彼で、ローテを睨みつけていたけれど。

「イダテをどこにやったんだ。おばさん」

ポップが先に口を開く。最初にこれが聞きたかった。今までの行いに怖じけづく前に、お構いなしに。イダテが盗んだ鞆を奪い返しにきたという事は、まず本人を捕まえてどこかに隠したからに違いないと、推理した。

「……イダテ？」

ローテは首をひねる。

「あんたの鞆を盗んだ奴」

ローテはそれを聞いて、ぼんと膝を叩いた。

「ああー、あの子ね」

「どこにいった？」

「そんなの決まっているじゃない」ローテは、口端を嫌らしく吊り上げた。「あの子は、私の鞆を盗んだ張本人よ。ただじゃ済まないわ。今の見て、そう思わない？」そう言つて、拳銃をもたない手で首を掻き切る真似をしようとした。「それに私はおばさんじゃない、まだ十……って!？」

紙一重の差でそれをかわした。

ポップはローテがまだ言い終わらない内に近づいて、殴り掛かった。一撃では終わらない連続攻撃を繰り返す。

イダテがどうなったかを聞き出すには、実力行使しかないと思つた。彼女は、女だからって手加減しなければならぬほど弱くはない。

ローテは何も言わずに、ひとつひとつ、左右に丁寧に動きながら、攻撃を見切っていた。

「最後まで話を聞くのが礼儀じゃない？」

連続攻撃でも、段々とその速度が弱まっていった。まだ子供である、ポップの体力が続かないからだ。やがて、一息つくかのように止まった。

荒れる呼吸を隠しながら。

「別に、あなたの歳聞いたって、変わらないだろ。聞いたことにちゃんと答えるよ。大人だろあなた」

「私はまだ、大人じゃないもんね。まだ花盛りの十八よ。おばさんっていう年齢じゃないし。言ったじゃない。盗んだ張本人なのだから、ただじゃ済まないって。……おっと、もうその手にはのるつもりはないんだな。残念でした」

そう言って、ローテは軽々とポップの腕をつかみ、握った。

今度の、ポップの攻撃は失敗した。

「離せよ」

「離さないよ。離れたらまた、殴るでしょ？」

ポップは、もう片方の手を動かした。

ローテは、少年の喉元に突き付けた拳銃をポップへと向けた。

飲んだ息は、冬の朝のように冷たい。

「イダテはどこだ？」

拳銃を突き付けられ、怯える態度をひた隠しにして、ただそれだけを聞こうとした。

「そんなに知りたい？」

「友達を助けちゃいけないのか？」

「犯罪者なの？」

ローテは、顔をしかめた。「人の物を盗むのは、犯罪だって解るかな？ 捕まったら、それ相応の処罰は当たり前でしょうに」

「あなたに、何がわかるんだ」

成金がかますありきたりな正論だ。それを突き通して、それでう

まくいくかよ。「あんたみたいに好きな物を買えるような、余裕は俺達にはないのに。俺達は、盗まなきゃ生きていけない。あんたみたいな金持ちは、大っ嫌いだ。好きなだけ踏ん返り返って、貧乏だからって俺達みたいな孤児を馬鹿にして」

「君……孤児なの？」

なんだよ、驚いた顔して。そうと知ったら同情するのか？ 表面だけで。

「そうだよ。だからなんなんだよ？」

「そっかあ。そんな年でギャングに入るっていったらそうだよね」
ポップを無視して、上の空で呟く。ふざけるな、と怒鳴りたかった。

「ちょっと、強く握りすぎてるわ。離してもらえない？」

ポップは、彼女がもう腕を握っていない事に気付いた。

手を離し、拳銃を元に戻すと、もう一方の手で鞆から何かを取り出した。

何も言わずに柄をポップに差し出す。

握ると、ずしりと重みが伝わった。

銀に鈍く光るナイフ。

刃の根元が微かに赤い。薄く、傾けただけで切れそうな、研ぎ澄まされた刃元が妖しく光る。

「なんだよ……これ」

「見ての通り、種も仕掛けもありません。ただのナイフでございませす」

わざとらしく、ぎょうぎょうしく、抑揚の付いた言い方だった。

「しかーし。私に攻撃したら……」ためを作る合間にハンカチを鞆から取り出した。それでその片手を包んだ所で「撃ってしまうでしよう」

手が膨らむように、ハンカチが盛り上がっていき、風に吹かないのにひとりでに滑り落ちると、拳銃がもう一丁出現した。

「私は、こいつみたいにドヘタではないから、お氣をつけて　ま

あね、至近距離で当たらないほうがおかしいけどね。銃器は、刃物より強いんだ」

試しに、動いてみるとカチャリと拳銃が音を立てた。銃口は、間違いないポップに向いている。

構えを解いて、刃先を下に向けた。

「なんだよ。これ？」

「私からのプレゼント」

「プレゼント？」

訝しげに思う。プレゼントなんてもらう道理なんてなかった。

「今から、二つの選択肢を与えよう」

ローテは、人差し指と中指を立てた。

「一つ」中指を折った。「ギヤングを止めて、私と暮らすこと」
「なに言ってるんだよ」

どうして、選択肢の一つが、この人にくらすことなんだ？ 確かに、美人と一緒に住むとなるといい毎日が送れるかもしれない。だけど納得がいかない。むしろ、変だ。

「変な事かしら？ 私は本気なんだけど。絶対楽しいと思うけどね。大勢だと楽しいよ？」

大勢って言っても、どのくらいだかわからない。それに、ギヤングの一員として活動しても面白くなかった。ただ生きるために、入っていただけだ。

「だから？」

「私はあんたを気に入ったんだ。少なくとも、この中では一番男らしい」

「それとイダテに関係があるのか？」

「おおあり。とローテは答える。」

「そう。条件がある。このナイフでイダテ君を殺せるかしら？」

9th：真意

「ちょっと待てよ！　なんだよ。それ！」

ローテが条件を提示してから、少し間が空いた。ポップは慌てる条件が突飛すぎたから。どうして、イダテを殺さなきゃいけない？　「まだ、話している最中なんだけどさ」

勿体振るように、ローテは拳銃の先端を唇へと動かす。吹き消すように、ではなく、唇を二つにわかつように。静かにしると示す仕草だった。

大それた話をしているのに、気にしない。まったく人を喰った行動。

「ふざっ！」

問答無用と、ポップはナイフで掛かろうとする。が、ローテが思わせぶりに拳銃を鳴らすと、すぐに黙ってしまった。

「いい子ね」

褒めたようでいて、そうでない。

「こついう、跳ねっ返りの強い子。大好き」
からかっていた。

「早く。つづきは？」

軽くあしらわれたポップは、いら立ちを隠さない。

「もう一つ？　簡単じゃない？　イダテ君を殺さずに二人仲良くギヤングをやつてればいいのよ」

ローテは、銃口を上に向ける。その行為には別に意味はない。隙ができたといわれる程の隙でもない。

「さて、どうするのかな？」

「決まってるだろ」

「本当に？」

ローテは拳銃を向け直した。「イダテ君さえいなくなれば、君は楽になれるんだよ？　足手まといがいなくなるし」

「足手まといっというな！ イダテは……」

「彼自身がそう言っただけ」

「嘘だ」

そう言っではみたものの、確信がなかった。あんなに落ち込んでいたら言い兼ねない。

「あんたの言うことを信用できるか」

けれど、考えてしまったから、強く言えなかった。しりすばみになりながら、弱っていく自信。

「受け取り方はどうだっていい」ローテは拳銃を下におろした。「だけど、彼は『死にたい』そうはつきり言った。あたしは別に、あんなを惑わそうだなんて考えてない。ただ事実をいっただけ。あんたがどう捉えようとしたってあたしには関係ない」

温度を感じさせないような言葉が、ポップをここに留めた。

この人は、何かがおかしい。けれど、ポップは何も言い返せない。おかしいのは、ここにいる奴ら皆同じだから。だけど、彼女は何か違う。

ローテは固くしていた表情をふと緩めた。

「外のトイレの中に閉じ込めたわ」

「本当か？」

「本当だとも。私は、修羅場っぽいところで嘘ついたことないからね。保証する」

ポップはきくやいなや、すぐに、撃たれる可能性も無視して工場の外に出ていった。

彼が見えなくなるまで、ローテは見つめていて。

背中が見えなくなると、ため息をついた。

「ああー、疲れた」

背伸びをして、一言。

「まったく、悪役って面倒臭い。もっと、簡潔にしたいけどさ。迫力でないよね」

まあ、彼の選択は予想がつくけど。

演技とはいえ、弱い女だった私を助けようとした。その勇気を買って。

「これで、私は一人になってしまいました」

それでもまだ、おどけている。

「結局、拳銃持ってこんな風に脅しても、人数かけて攻められたらひとたまりもないのにね。二丁拳銃だなんて、ロマンがあるけどね。女ガンマン」

確かに、彼女の言うことには一理ある。

拳銃に装填できる弾の数はせいぜいが一桁だろう。ここにいる相手は、数える必要がないほどに多い。無我夢中に撃つだけではうまくいくはずがない。

「まあいいや。結局、あの子達に醜態見せなくていいし」

にんまりと、地獄の極値か天国の極値、どちらかを振り切るような笑顔。

「どうするかな？ 無力な女一人と血気盛んな不良少年ズ。結果見えてるよね？ 絶対」

ようやく、彼女の言っている意味に気付き、彼らがそわそわし始める。まだ垣間見ることも許されない、見目麗しい肢体を想像して、鼓動が高なる。もうすぐ、夢が現になる。

「その前にさ、一つ種明かしでもしていい？ 壊れる前に、これだけはばらしときたいのだけど」

反応がないということは、それだけの時間を許してくれたのだろう。お人よしいが多い。

これは、賭けだ。配当はどれくらいだろうと考えようとして馬鹿馬鹿しくなった。取り分なんて一つもない。

「なんで、私の膝にトウガラシ水が入ってたと思うかな？」

はい、君答えて。と右にいた少年を指す。

「トウガラシ好きなんだろう？」

けだる気に答える少年の目だけは血走っていた。

「残念。もう少し捻った答えはないの？」

ローテに罵倒された少年は、げへへと気持ち悪い笑みを見せた。
「どうしてか、なんて簡単じゃない。悪戯がしたかった。たったそれだけ」

反応を探るかのように、周りを見渡す。一瞬だけ、その表情を変化させたが、誰も気付かない。

「私には、弟と妹がいてさ、二人ともすごく可愛い。もう大好きで大好きで。あの子達がいなくなったりしたらどうしようってくらい。けどね、私がいなくなっても、大丈夫だと思う。普通に暮らせると思うんだけど。私はあの子達なしでは生きられない」
話している途中に彼女はしんみりとし始める。

早く終わらせる。と外野からの野次がとんだ。

「わかってるわ。でね、彼らが悪戯するのよ。反抗する年頃だし」

ローテは拳銃を持つ手を天に伸ばす。空いた手を、肘関節の内側に添えて。

その手で肘を突いた。

もちろん、拳銃を持つ手は内側に曲がる。

「膝カツクンするのよ。まったく、信じられる？ ガキ臭い事ありやしない。まあ、そこら辺がズッキンつてくるとこなんだけど。でも、気配無しで忍び寄るんだから。だから、そうした時に驚かそうかな、なんて思い付いちゃって。ほら、悪戯したただけなのに、一大事になっちゃってさ、あら大変。ってな感じで。あーあ、あの子達が驚く顔見たかったのになあ。もうできないや。月と太陽見るように反応が違っただけだなあ」

ローテは、上をむき、わざとらしくため息をついた。

「なあ、もういいか？」

待ち切れなくなったかのような、男達の鼻息が聞こえた気がした。
「まだまだ。なんで、こんなどうでもいい話を長々としたか、解るかしら。お兄さん方？」

「怖いからだろ？」

「何が？」

「俺らを相手にするんだぜ」

「ああ、怖いよ……。だから、時間稼ぎしたの。まったく、遅いつたらありやしない」

と、思わぬ方向から悲鳴が聞こえた。サンドバッグをたたき付けるような音を立てて、悲鳴をあげたそいつは地面に叩き伏せられた。その彼の背に不謹慎にも片足を乗せる人。一人。

本来は背中にあるはずの、幾何学模様を楕円の中に潜める紋様を持つマントが目の前にはためいた。

人間と記したのは、そのマントで顔を隠しているから。

相変わらず、演出が臭い。とローテがため息混じりに情けなく思っていたことは置いといて。

ギャング達には、効果があつたようだ。

「なんで警備隊が!？」

「そんなの決まってる。私が呼んだのよ。ねえ、アクイース」

ローテがマントの人間の名前、わざと名字を言った途端に、工場内がざわついた。

「今なんて言つたよ」

「ア……アクイースつたぜ？」

「マジかよ! でもどうして」

「『黙殺・アクイース』が？」

その通り名を皆が口にする、マントの中から含み笑いが聞こえた。

「まだ、その名が通用するのか。どこのたまり場も全然、変わっていない、今も昔も」

マントを脱いで、素顔を表す。先ほどまで散々にローテに弱みを握られていたフィルがいた。

「いかにも、俺がアクイースだ。『黙殺』の通り名はとつくの昔に捨てちまったが。で、お姉さん。白馬の騎士が助けにやって参りましたよ」

右手を左肩にあて、仰々しくローテに礼をするフィル。

「何が『黙殺の通り名は捨てた』よ。いつも、女の人、口説く時は、『黙って殺してお持ち帰り作戦』とか言ってる癖に。そのうえ、失敗だらけ」

罵声を浴びせた。

「ちよつと待て。なんでお前がそれ知ってる？ しかも、それをここでばらすな！」

もちろん丸きこえである。ギャング達の、こそこそしている声がまるで釘を打ち下ろすかのように、フィルの心に突き刺さっていた。

「遅いのよ。白馬の騎士とか余裕ぶっこいてるなら、早く倒しちゃってよ。こいつら」

「分かった。って、てめえらも笑ってんじゃねえ！」

怒鳴りつけるフィルを片目でみながら、彼女は安心した。これで勝ち越せる程度までどうにかできそうだ。さて、どうやって始末しようか。

彼女は、人差し指を口に持って行き、舐めた。

考える時の癖。

彼女が作ったトウガラシ水がためらいなく口の内部に入っていく。ちなみに、彼女が作る料理は…。

すぐに指を吐き出してしかめっつらを作った様子を見てわかるだろう。

10th：彼女と双子

黙殺、アクイース。

彼がそのようにあだ名を付けられたのには、二つ理由があった。ご多分にも漏れず、一つはよく知られていてそうかと納得できるような理由。

もう一つは、ローテとその仲間、警備隊の中でしか知りえない事だった。

彼はその意味で『黙殺』と呼ばれる事を酷く嫌う。自分の過去を勝手にほじくり返される気分がするからだそう。

その出来事があったからこそ、彼は警備隊に勤めようと決意したのであって、また、もう二度と自分が経験した体験を人に味わせないようにと力を尽くしていた。

彼がどうしてそうなったのかは、また別の話。

.....

タオルに舌を絡ませて、どうにか舌を刺すような辛みを抑えた。やっとなのである。思わず、ローテの顔が綻んだ。

今度からは、弟達に料理を任せないで、自分でやらなきゃ。とまで決意した。何度めだろう？

けれど、弟達が料理を自らし始めた理由が、姉の料理があまりにまづかったから。それならば、自分達でやったほうがまだ、と結論づけた事を彼女は知らない。

「まだ料理下手か？」

「五月蠅いな、人には向き不向きってものがあるのよ」

二人の周りには、まるで嵐が去った後の枝葉のように人があちこちに倒れていた。

皆が一様に気絶している。いつの間にか手にした武器を全てロー

テに持って行かれて。彼女の足元に無造作に投げ捨てられていた。ほぼ全員が、フィル一人にやられてしまった。

少しだけ、ローテを狙った奴らだけは、彼女が倒した。

「だけど、流石よね。伊達に『黙殺』の通り名は持ってた事だけの事はある。あつ、先に言つとくけど『声も出さずに溶けたような気配をもって相手を潰す』意味でね」

ああ、面倒臭い。

ローテは、武器と同じくらいにぶつきらばうに置かれた鞆を大事そうに持ち上げる。

傷が付いていないかもう一度確認。隅々まで確認して、変化無し。安堵する。やっと安心して持って帰れる。

「こいつらが弱いだけだ。俺が現役張ってる時よりもヘタレになってるんだ。こいつらもみんなも」

腹の足しにもならないと、口走るフィル。

ポケットから、袋を取り出した。中には、白い粉が舞っていた。

相手にした少年達のポケットを探ると案の定、出てきたのだった。

「やることは、いつの時も同じなのにな」

「全くもって、気に入らないな」珍しく、フィルが怒りを隠さない。

「こんな、クスリごときで人生狂わせるなんて…。狂っていく経過を黙って見てるしかない身にもなってみろ」

「同感」

そう言ったローテは再度、タオルに顔を埋めた。

「…からい……」

「どうすればそんな辛い物が作れるんだ？」

「大きなお世話」

再度、舌を拭ってしかめっつらを見せた。

「私だつて、本気になれば美味しいの作れるんだから」

「本当かよ？」

「最後の晩餐にしてやるわ」

「くたばれって言いたいのかお前は？」

「どうして、そこだけ聡いかな？」

「舌出して照れても、ダメだからな」

「リーを口説こうとして失敗したのに？」

「また蒸し返す」

「リーは性格きついけど、中身はとても優しいんだから。黙ってないで攻めて攻めて、攻め続けるのよ。『何、あいつ。あたしから誘えつての。そんな野郎こっちからお断りだ』リーからの伝言」

「リーさんって厳しいよな。よくあれで、医師が務められるよな。感心する」

「それは、患者さんがすぐに病気にならないためにやってるのよ。甘くしたら、リー目当てでやってくる患者が増えるかもしれないからだつて。人気あるし。実際、何もないのに来る患者もいるんだつて。『恋の病』とか真顔でいった奴には飛び膝蹴りかまして、入院させたらしいけど。本当は、強くて頼りがいのあるお姉さんなんだから」

「へえー」

「応援してるから。多分、二人はいい仲になると思うんだ」

「それは、おめでたい。助言は受け取っておく」

フィルは、肩をすくめると工場の出入り口に向かった。

「ちよつと。まだ終わってないんだけど」

「仲間がもうそろそろ来る頃だ。大体の場所しか教えてないから、出待ちしなければならぬ。それに、家族水入らずの中に俺は邪魔だろ？ 怒られとけ」

フィルはそう言うのと振り向いた。「お前は十二分に必要とされてんだ」

決めゼリフのような言葉を吐くと、そのまま出入り口に消えていった。

ああ、もう。わかりましたよ。外へ出ていった彼にふて腐れるように彼女は一人こちる。黙って殺すとか言つて、臭い一言吐くから微妙なのに。

倒れ伏す少年達を見回して、ため息をつく。

それに気付いたのは、フィルを待ったために一人で時間稼ぎをしていた頃。もしかしたら、色っぽく、ぶざまな演技をしていた時からいたのかもしれない。

しかし、彼女が一人になっても何も反応はない。ギャング達が気絶している光景に変化はない。

普通、自分達から動かないよね。

誰がいるかって？

彼女は知っている。

両手の側面を口に沿えて、くちばしのように両手を丸めて。

「ソル！ セレン！ いるのは分かってるからね！」

工場内に響き渡る大声。　むくりと起き上がる、ギャングの内二人。

素で驚いた。

ひつ、と声を漏らすと後ろに一步引きさがる。

左右同時に起き上がったから。

だけ。

「中途半端に驚かせるような教育はしてないのに」

っていうより、何故に怪物のように歩く？

一步がすごい短い癖に、かなり遅い。

何の冗談？

「後一步でも近付いたら撃つからね」

脅しにぴくりと、二人の動きが止まる。朝日を浴びた吸血鬼のよ

うに、床に倒れ伏した。

まったく。

芸が細かい。

「嘘だ」

短い否定が左側から聞こえる。

「嘘じゃないに決まってるじゃない。今まで、私が嘘をついたことがある？」

「何度もあるじゃん」

疑問に答える声が右側から。

「まず一つ目」

左側に倒れていた、ギャングがよろよろと立ち上がる。

「今日早く帰ってくるって言ったの誰だっけ？」

同じく、右側に倒れていたギャングがよろよろと立ち上がる。

「二つ目」

「いっつも、朝早く起きるって言ってるのに」

「起きないし」

「三つ目」

「お酒は、二十歳を過ぎてからって言ってるのに」

「こっそり飲んでるでしょ？」

交互に言い終えるたびに一歩ずつ近づいてくる。声音は、似ているけど微かに高低の差が耳に残る。

「ああー！ 分かった。訂正するから」

手を上げ、降参だと。

苦笑いするローテ。

「許さないから」

「いろいろとね」

二人は同時に顔に手を掛けて、素顔をさらした。

銀色の髪は、性別を示すように特徴的。刈り上げた髪と、肩まで届く髪。

双子だ。中性的な顔立ちには、どちらの性別からも好かれるようだ。

歳は、ローテとポップの間だろう。

二人とも、ローテの家族だ。血は繋がっていないけれど。

「で、その手に持っているブタさんの貯金箱はなにかな？ ソル？」

「どうして、これが貯金箱だって分かるんだい？ 姉さん」

右手に豚の置物を持った刈り上げ髪の男の子、ソルが悪意を持った笑顔を見せる。

「姉さんには、ずっと黙っていたと思うけど」

「そつ……それは」

「お姉ちゃん。もう観念しなよ。もう、お縄につかなきゃ」

最近流行りのラジオドラマ、『東国の武士』の口まねをみせる女の子、セレンが自白を促した。

「でさあ。この鞆、かつこいいね」

「ぐう」

何となく、凶星というよりも、思わせぶりに近づいていく追及。

真綿で首を締められるような気分をローテは味わった。

貯金箱だつて分かるのは、私が鞆を買ったためにお金をその中からくすねたからよ　　なんて、死んでも言えない。

墓穴を掘らないように、黙ることにする。黙秘権、黙秘権。

「姉さん、お金を盗んだでしょ？」

「お姉ちゃんだけだよ。こんなに器用に盗まれた後に裏工作するの」セレンがいうやいなや、ソルが豚の置物の向きを返る。頭の向く位置が逆になり、ソルに向いていた面がローテに向けられる。

そこには、豚の胴体を囲むように手術したような跡が、四角の形をして微かに残されていた。

それも、一寸の違いも許さずにまた、張り合わせられている。

「こんな面倒臭いことするのは姉さんだけだ」

呆れた、とソルは暗に言っていた。

「まさか、弟妹からも盗むなんて」

セレンが嘆く。

「これは、罰だね」

「これに懲りればいいけど……」

セレンは五歩程度の距離から小走り、唐突にローテに抱きついた。彼女は逃げずに、迫ってくる妹を受け止めた。

手を回した背中が、震えている。

「心配したんだから。なんで、私達はお姉ちゃんがいらない。なんて思わなきゃいけないの？　こんなに大好きなのに！」

ああ。とローテは理解する。やっぱり、私が撃たれたって演技し

てた時からいたんだ、と。そこまでは気付かない。恥ずかしい行動してる時も平然としようとしていたのに、愛すべき者が近くにいることも知らないなんてね、我ながら情けない。

「姉さんは、無茶ばかりだ」

言葉は少ない。けれど、ソルも立ちながら涙ぐんでいた。

ローテは二人の仕草を見て、しかたないと力を抜く。二人とも、純情なんだから。

でも、そうであるなら。彼等が汚れないように守らなければ。汚れるのは、私だけでいい。

「辛気臭い顔しないの」 セレンの背中を二三度叩き、見上げた彼女を勇気付けるように笑う。何事もないように。

「ほら、ソルも」

泣き顔をみせていたセレンが、きょとんとした顔を見せたのを確認すると、ソルにも顔を向ける。

ソルはもう平静を装っていたけれど。多分、見せ掛けだろう。

「で。あの男の子、どうかな？」

ローテの問いに、まず、セレンが答える。「どうせ、お姉ちゃんのことだから大体は分かるけど」

「ソルはどう思う？」

「そんなの当たり前に決まっているさ」

朗らかに答えるソル。

『人が多ければ多いほど、楽しくなる』

謀ったのか、偶然か、双子の声は調子とともに揃っていた。

「そうこなくっちゃ、っとその前に」

ローテは鞆から縄とハサミを取り出した。セレンと距離をとり、縄を均等に一定の間隔で切っていく。

「警備隊が来る前に、彼等の手足を縛っとなきゃあね。少しは、恩でも売っとなきゃ。手伝って」

左手に束ねた縄を持ち上げてローテは言った。
もちろん、双子は姉の頼みを快諾する。

11th：決断

ポップは寂れ、廃れたような道をまるで、間に合わなければ自分の代わりに処刑されてしまふ、友達のためだけに走る若者のように駆けていた。

呼吸をすることが無意識から意識的になっていく。それほどまで急いで。

イダテのように早くは走れない。けれど、精一杯走った。頭の中は、イダテの無事を祈ることではいっぱいだったが。

だけど、一方で紅毛の女の人の条件も気になりはじめていた。

もし、あの人と一緒に暮らすことができたなら。

好きな事なんて、飽きてしまふほど出来るだろう。毎日の寢床にも困らないし、ご飯だって心配しなくていい。

あんな高価な鞆を買うのだから。

甘い幻想が彼を誘惑する。そのためなら、今まで苦楽を共にしてきた仲間を殺すことなんて……。

悲しいかな、今のポップにはそれを完全に否定することはできなかった。

むしろ、彼女の条件を受け入れてしまおうとするまでに心が動いていた。

もう、孤児の生活なんて嫌だから。

.....

地面を蹴り続けた足を止めても、まだ両足とも駆けようとしていた。急に止まったから、走っているときには気にしなかった呼吸が、ひどく荒く感じた。寒風が直撃し続けた耳の裏が痛い。ごうごうと血が耳元を掠める音が聞こえる気がした。

息を吸うと、喉の奥が張り付いたようで、うまく唾が飲み込めな

い。痛んだ鼻には、つんとくるような空気に混じるアンモニア臭が突き刺さる。

ポップはイダテが捕まえられている、公衆便所の目の前に立っていた。

.....

久しぶりに誰かが入る気配がして、イダテは目を覚ました。
なんだ僕、まだ生きてるや。

それが嬉しい事が、嘆かわしい事なのか彼には、判断がつかない。口にくわえていた布は、噛み合わせたままで固まってしまった。だから、死のうと決意しても、口が動かない。気が遠くなるほど重い布をずっと噛み締めたまま、じっと耐えるしかなかった。
まるで石のように。

「イダテ！ どこだ！」

ふと聞こえた声。多分、苦楽を分かち合ってきた親友だ。叫んだ声が張っていて、あまりよくわからないけれど。

ここにいるよ、と動かない体を無理矢理動かして、音をたてた。彼に、最期の願いを求める事を決意して。

.....

イダテ！ そう叫び、ポップは音がした扉を蹴破った。錆び付いて、動きが悪くなったそれが、それでも勢いよく跳ね返り、戻ってくる。肘打ちをして、扉が戻らないように押さえ付けると、ようやく彼の姿を見つけた。

下着だけを纏い、ぐったりとうなだれているイダテの姿を目の当たりにして、ポップは言葉を失う。

彼の名を呼ぶ。それだけの声も驚きにかすれた。

聞こえるかどうか、微妙な声。けれど、イダテはわずかに顔を上

げた。

まだ、生きてる。ポップは、急いでイダテの口元を塞ぐ布を抜き取るうとした。

左手に布からくる重みが伝わる。こんなに重いものを口に加えていたのか。今更ながら、驚いた。

なんだ、これ？ と普段のポップなら疑問に思ったはず。けれど。

かわりに、ナイフを持った右手をまた、力強く握った。覚悟を決めるために。

幸せが一人しか与えられないなら、鬼と言われようが、悪魔と言われようがつかみ取ってみせよう。そう決意した。

目かくしを外さない。イダテを失望させない。信じていた友達が裏切る。まさにその瞬間を目の当たりにしないから。

一瞬の内に終わらせる。ポップは息を止めて、振り子のとっぺんに向かうようにナイフを振り上げる。

無音。

その時分が、かすかな、本当に小さい声を耳に届かせた。

「ごめんね」

そんな言葉が、ポップの決心を鈍らせた。

振り上げたナイフを振り下ろす事ができない。右手を反らせたまま、不自然な体勢のまま、固まる。

「ポップでしょ？ ここにいるの。いや、絶対そうだ。僕みたいな奴を助けに来てくれるのは、いつもポップだけだもん」

そのポップが今、イダテを殺そうとしてるのに。ポップは、戸惑った。

「それなのに、僕はこんなふうになって。何にも役に立ってないね」

ずっと、ぼそぼそと言っていたけれど。

ぐさり。ポップの中に一言一言、突き刺さっていった。

「ポップってすごいよね。いつも、僕ができない事平気でやってのけるから。だから……」

言おうか、言うまいか。そう悩んでいるようだった。

「僕を殺してくれないかなあ？」

イダテは、不自然な程自然に、言葉を続けた。

「今持つてる布を離すだけでいいんだ。そうすれば、上からナイフが落ちて来て、僕は死ぬことができる。僕、そうしようと思ったけど、出来なかったんだ。臆病だね。僕……だからさ」

イダテは、目かくしされたまま、何も見えないはずなのに、ポップを真正面に見据えた。

「お願い」

今までで1番重たい願い事だった。

ポップにとっては、好都合なはず。願われてまで、殺される事を望むのだから。そして、彼もそうしようとしていたのだから。

だけど。

「ふざけんな」

ナイフが床に落ちた。ポップの空いた右手は握りこぶしを作る。

「俺が出来る訳無いだろ？ そんな事」

「ずっと、僕はポップの足手まといのままだよ？ もう、面倒を見なくてすむよ？」

「馬鹿いうな！！」

さすがのように言い募るポップを振り払うかのような、怒鳴り声。

「何時から、お前は俺の足手まといなんかになったんだ！ 俺は、そんなの言ってねえ！」

「だけど、いつも迷惑かけてるよ？ 邪魔になってるよ？」

「邪魔になんかなくてねえよ」

けれど確かに、邪魔だっと思ったことはあった。

「だけど、それは一瞬。イダテがいたから、今まで生き延びてこれた。それが大部分。」

どうして、イダテを殺そうなんて考えたのだろう？ 殺してくれ

なんて、頼むよりは生きたいともがいてくれたほうが、そして殺された後に怨まれていたほうがよっぽど良かった。

そうしたら、悔いなく。けど、背中に重いものを背負え、後の幸せを無駄にしないと誓ったのに。

殺してくれなんて頼まれたら、よっぽど殺せなくなる。ますます、イダテがかけがえのない友達だって実感するじゃないか。

イダテを見殺しになんか出来ない。

「いつ、俺が邪魔にしたよ？」

「いつだって、足手まといだって思ってる癖に？　僕みたいなひ弱な奴だなんてさあ！」

投げやりに吐き出した。その声は辛い程に悲壮に響く。

「俺、そんな風に思われてたのか」

例え、自暴自棄になつて、気がつかなくても。傷つけるような言葉を手当たり次第に投げられたら、誰だって傷つく。

「そうだよ。ポップなんて、大っ嫌いだ。いつもいつも自分が強いからって鼻にかけて、僕なんか御情けにしか思ってない癖に。思

つてない　くせに」段々と涙ぐむ。鼻水が垂れると同

時に目かくしの色がくすみ始め、隙間から、一筋、二筋と水が零れ落ちて「僕：は、こん　、なに悪、い奴　な、んだよ？

だ、から、お願い…。お願い…だ、よお」

ひつくひつくとしやくりながら、顔がくしゃくしゃに歪んでいきながら、最後まで言い切った。

「お前だって、人の物盗んだり、人の顔色ばかりみてんじゃねーか。俺もイダテなんて、大っ嫌いだ。けど」ポップはイダテの両肩をつかむ。「だけど、俺はお前と親友でいたいんだよ！！　何でなにもないとか足手まといなんか言っただんだ！！　お前にはそれ以上にいいところたくさんあるのに！！　そんなにないない言ってるなら、俺が見つけたしてやる！！　お前は悪い奴なんかじゃねえ！！！！」

「そ、そ……んなこ…といった、…って」

「いいか！ 俺はお前を殺したりしないからな！ お前がどんなに足手まといでも役に立たなくても、俺は絶対に見捨てないからな！」
「でも……」

「でも、もへつたくれもねえ。信じてくれよ！ 俺はお前を絶対に裏切らねえからな！」

半ば怒鳴るように張り上げていた声を止めると、ポップは三度息をつく。荒げた気持ちを鎮める。目かくしされたイダテを睨んだ。イダテの意志を翻そうとするかのように。

ポップの真っ直ぐな視線を受け止めるかのように、イダテは目かくしをポップに向けた。

鼻水を一回だけ大きな音をたててすすった。

「本……当……？」

ポップは、うなづく替わりにイダテの肩をぎゅっと握りかえした。涙は、ポップの声に掻き消されたように止まっていた。

「そんなに、簡単には変えられないよ。でも、そうならないように頑張ってみる。ポップの事、信じるよ。そしたら、僕の事許してね。もう死にたいなんて、二度と言わないよ」

イダテはそう宣言すると、ごめんね、ありがとう。と微かに聞こえるような声で言った。

ポップは、両肩を掴んでいた両手を首に回して抱き着きたかったが、そこまでしては恥ずかしいと感じてやめた。

「けど、ポップ」

「なんだよ」

「両肩に手があるっていうことはさ、ハンカチは何処にいったの？」

「ハンカチ？」

「すごく重かったの」

イダテがそう言った瞬間。本当に沈黙がおりた。血の気がさあつと下に向かっていく。心臓が驚いたように弾んでいき。

ポップは左手を見た。その手は、ハンカチを握っていたはず。幸運なことにハンカチはポップの指先に絡まっていた。

のだが。

確認した拍子に、ハンカチがするすると指の間から逃げていった。呆然とそのなりゆきを眺めていて。

手品師が、ハンカチの中に隠していたものを見せるかのように、ハンカチがとられて行く様子を半ば見た所で、眺めた所で。

ポップは真上を見た。

爆弾の導火線のように、繋がっていたハンカチの先に括り付けられたもの。

彼は、目を疑う。

それは、どう叫んだ所で避けられるものではなく、ただ見守るしかなかった。落ちていくそれが、彼らをめがけていて。

妙に生温い液体が彼らに降りかかる。

12th:そして…

くしゅん。濁音が入り交じった音が二つ。高らかに茜空に響き渡った。

二人同時のくしゃみ。

調子を合わせるかのように同時に鼻をすする。

あまりにも同じだったから、怪訝な顔をしてお互いに顔を見合わせた。

「まったくさ、こんなにも簡単にひっかかるなんて。お姉さん感動しちゃう」

悪意とからかいが混ざり合うように。けれど、そう快活に言っただとしても、引っ掛かった当事者達は腹わたが煮え繰り返ったままだった。

寒さに震え、歯をかちかちと鳴らす二人は彼女を睨みつけた。

ポップが誤ってハンカチを放した後。

空から落ちてきた物はナイフではなかった。

真上で、バケツがからからと鳴っていた。

重さの元凶だったそれを宙空にぶちまけて。

降ってきた大量の水。

ポップ達は、かわす暇なんてもちろんない。啞然としたまま、成す術もなく、全てを被ってしまった。

……………

「酷い……………」

普段は滅多に怒らないイダテが、不穏な雰囲気を身に纏う。それもそのはず、寒気の下で下着のままで過ごす羽目になったただけでなく水も被ってしまった。

その、原因が目の前にいるローテのせいだった。フィル・アクイス、と偽名まで名乗って、声色まで変えた彼女がイダテを監禁したのだから。

どこから持ってきたか分からないような毛布を、てるてる坊主のように体に巻き付けていても、その迫力は弱くならない。

幸いな事に、ローテが服を剥ぎ取ったおかげで、それは濡れなかったけれど、寒かった。

「まだ、子供の癖に私から物を盗むからよ。『死にたい』なんてじくさいことやってたし」

そう言いながら、ローテはポケットからティッシュを取り出して、二人と視線が合うように屈んだ。

「鼻垂らしながら言っても迫力ないよ。ほら」ローテは紙を取り出すと、イダテの鼻に当てた。「おもいつきり鼻かんで」

「こんなの、恥ずかしいよ。自分で出来るから」

怒っていた態度が嘘のように、恥ずかしがりながら逃げるように身をよじる。イダテはたじろいだ。

「こんな美人に鼻をかんでもらうなんて、滅多にないよ。ほら、早く」

照れも恥じらいも、まして汚らしい孤児であることを気にしない笑顔は、悔しい程にまぶしい。

イダテは観念したかのように、鼻を鳴らした。遠慮がちな音だった。

「うん。上出来。どっかの警備隊員なんて、遠慮なしにやってさ、その後タコ殴りにしちゃった」

「はあ」

「次はキミだ」

俺？ ポップは自身の鼻先を指差した。

「俺もやるわけ？」

「当たり前じゃない、むしろ君のほうがイダテ君よりもでてるし」
「嫌だ」

ポップは一步だけ後ずさる。

ローテは二歩詰めた。

「なんで二歩も詰めるんだよ！ 反則じゃねえか」

そう駄々をこねている間に、ポップの両手は捻り上げられた。

ローテの片手だけで。

「ちょ…待って！」

「ふふふ。つーかまーえちゃったあ」

語尾にハートがつくくらいな口調とともにローテはほくそ笑んだ。
すぐにポップの悲鳴が響く。そうだったのは言うまでもない。

.....

「本当に捕まったんだ」

しみじみと言うイダテが指しているのは別にポップの事ではなかった。

眼下に写る人の群れ。

ギャングの構成員が警備隊に捕まえられていた。

アリのように働く警備隊員に連れられてお縄につく彼らが列を崩さずに歩いていた。

そんな大捕物を見物しようと、多くの野次馬がうごめいている。

「悪は滅びるものよ」

鉄柵に腕を寄り掛からせて、勿体振るように彼女は言う。

言い忘れていたが、彼らはギャングがいた工場跡の屋上にいた。

ギャングの少年達がここにいつもいたから、彼ら二人は初めて足を踏み入れたことになる。

建物自体が低くて、眺めがいいとはいえないけど、普段見ている景色を上から眺めるのは不思議だと、イダテは思った。

「かつこつけて何言ってるんだか」

斜めに構えた態度をとるポップ。

「一遍言ってみたかったのよ」

照れも見せずに、寧ろ堂々と言い放った。

「こんな機会、滅多にないんだから。そうだ」

鉄柵に背中を預けて振り向いた。二人が視界の中に入る。

「二人とも、これからどうするの？」

「どうするの？ って言われても……」

イダテはポップに顔を向けた。

「俺はもう決めてる」

彼女が示した選択をしたから。

「私の厄介になるんでしょ。二人で」

『へっ？』

素っ頓狂に同時に声を出す。二人はもう一度、顔を見つめてローテに顔を向けた。

「何ですかそれ？」

「やくそ……」

「いいでしょ？ 家族ってたくさんいたほうがたのしいもん。絶対に」

ローテは指を口に当てた。眼差しでポップに喋らないようにと釘を刺した。

「そんなに驚かない。ほら二人ともこっち来て」

二人は、抵抗もなく、ローテにふらつと近寄る。

ローテの目の前で立ち止まると。

彼女は二人を両腕で、まとめて抱きしめた。

恥ずかしい、と彼らが逃れようともしがいても容易には外れないように。彼女の決意を示すかのよう。

「もう大丈夫だからね。君達は、ひとりじゃない」

それは、さっきまでの彼女の軽い態度と違って、とても優しくかった。

互いしか信じて来なかった二人に対して、その行為はとも無防備に見えた。無償で愛されることなんてなかった、安らかに抱きしめられることなんて今まで一度もなかったから。だけど、彼らは安

心してもがく事なく抱きしめられた。

「あんたも、そうしてもらいたい？」

不意に言うローテ。

「そうしてもらいたい」

二人の背中に響く、少年のような声。

「このど変態」

微笑みながら、罵倒する絵が二人に浮かぶ。

「なんか酷いな。何が違う？」

「下心まる見えな鼻の下伸びきった顔」

「具体的にいうなよ！」

「本当に伸びてる？」

酷い事言われている人とは違った、鈴のなるような甲高い声音。

「計ってみようよ。もし本当に伸びてたら。フィルさんは」

さっきの声とは声音が似ていた。けれど、少し低く聞こえる。

『ど変態』

二つの声が綺麗に重なり、調和を聞かせた。

「お前らも調子にのるなあ！」

『ごめんなさい』

「だって、フィルさんが楽しそうだったから」

「フィルさんが機嫌よかったから」

涙声が混じる声色。

「いや、俺が悪かった。大人げないよな。こんなんで……」

明らかにたじろいでいる様子。

『フィルさんが鼻伸ばすところを想像すると笑えたから』

「って。おい！」

やりとりを見ていたローテが笑う。

抱きしめた二人を解放して、声のした方向に振り向かせた。

階段の両脇に容姿の似ている銀髪の二人組が立っていて、彼らとちょうど二等辺三角形の頂点を作る位置に、長身の男が背中を見せ立っていた。

二人は、男の羽織るコートに見覚えがあった。

黒色に統一された色調。背中を中心に幾何学模様に装飾された絵柄が大円に囲まれているそれは。

警備隊員の基本装備だった。

警備隊だ！ と二人は逃げ出そうとして気づく。

もう俺達はギャングの一員じゃない。

「紹介するわ。階段の脇に立ってる右側。短い銀髪の子がソル。左側の髪が長い、銀髪の子がセレン。双子で私の妹弟。で、あのコート着てる変態野郎がフィル」

「かなり、俺の扱いが酷くないか？」

フィルは振り向いて、苦々しく顔を歪めた。

「大丈夫だよ。フィルさん。こういうときはね」

「『嫌いよ嫌いも好きの内』って解釈すればいいんだ」

それは、違うと思う。

「で、この子達は……あれ？ 名前聞いてなかったわ」

「姉さん」

「お姉ちゃん」

双子があきれたように、肩を落とした。

『まあ、らしいって言えばらしいよね』

「まあいいや、君達自己紹介しちゃってよ。この双子ちゃんとフィルにさ」

ほらほら、と手を差し出すように三人のいる方向にむけた。

「俺は、ポップだ」

「僕はイダテです」

「私は、ローテよ」

間髪入れずに、流れるような自己紹介が終わった。一人、余計な気がする。

「魔術師のな」

フィルが付け加えるように言った。

『は？』

訳が分からないと言っても言いたげな二人。

「そこのお姉さんがそうなんだ」

フィルが指指した先にいるローテ。

「本当に？」

「マジ？」

この街を騒がしている泥棒が、こんなに若い。それに紅族の女の人だとは。

驚いた二人に見つめられたローテは、はぁ、とため息をつく。

「フィル。空気くらい読んだら？」

「俺をこけにした仕返しだ」

「私は、からかってただけなんだけどな。」

そうだよ。いかにも、私が世界に五人としない特A級犯罪者。西の魔術師とはこの私、ローテ・ヒルトよ。

でもさ、ここで言うことではないんじゃない？ 私だってさ順序よ

くさ、この子達に伝えようとしたかったのに」

自分が魔術師だと明かしてから、ローテは段々と不機嫌になっていた。まるで季節外れの夕立のように悪くなっていく。

「魔術師だつてのは、いつか絶対に知られる。それなら、今ここでばらした方がいいと思わないのか？ いつか話すとか言いながら、結局お前は言えないだろ。俺に言えなかったみたい」

「違う。私は……」

「何が違うんだ？」

「少しくらい、俺達を信じてみたらどうだ？ とフィルは続けた。」

「信じてる」

ローテは、そう言い切った。番犬が見知らぬ来訪者を威嚇するように。

「姉さん……」

「フィルさん、大人げないよ。そんなの後でいえないじゃない」

「セレン。言うべき時がこういうのにはある。今言つとかなきゃ、絶対にこいつは話さない」

フィルの言った事は正論なのか悪論なのか、どちらかは分からない。けれど、この場の空気を悪くしたのは間違いなかった。

子供二人も、双子も話すきっかけがつかれない。

ただ、警備隊員と魔術師の間で険悪な雰囲気が生まれただけ。後味の悪い空気が残った。

13th：事態は変わる

そんな険悪な状況などいざ知らず。こつこつと階段から響く音が、段々と大きくなっていく。誰かが、屋上へと向かっている。

皆、階段を注視して。

「やっぱりお前らか！」

階段から一人の男が現れた。フィルと比べたら、顔半分くらい背が小さいが、上背がある壮年の男性だ。口元に蓄えた熊みたいなヒゲが温和さを強調する。

「イアンさん！」

最初に気付いたローテが素っ頓狂な声をあげた。

「副長！ でも、今日は非番じゃ？」

フィルが言う通り、彼は警備隊副隊長。

「確かに非番だ。だが、家内が郵便局長だと知っているだろう。『休みの日も家でごろごろしてないで手伝ったら』なんて冷たいからな。非番の日もこうして仕事するしかない。……手伝うと、家内の機嫌が良くなるし、いつもより食事が豪勢になるからな」

自分だけが知る秘密を漏らすかのように、楽しげに話す彼。その仕草には警備隊副隊長を勤め上げるような、厳しさはなかった。

「それも一段落してだ。ちょうど事務所の近くだったからな、紅茶の一杯でも貰おうかとよったら、誰もいない。レムリアに聞いたら皆、捕物に行つて出払つてるってな。面白そうだから、見物しにいったら案の定お前らがいた訳だ」

見た目に違わないバリトンボイスで語る。

その声音か、存在感か、はたまた予想外の人物が現れたからか、険悪な雰囲気は忘れ去られていた。

そんな一大事に関わっていたことに、彼は気付くわけもなく。

イアンは、見知った顔を見つけた。

当然見知った顔の男の子も驚いたように視線を向けた。

「おじさん！」

イダテは口を丸くして叫んだ。

「よっ。坊主」

右手をあげて、イアンはそれに答えた。

「何、イダテ？ この人とどういう関係？」

黙っていたというよりも、話に参加出来ずにいた、ポップがやつと口を開けた。

「いつも郵便配達を手伝ってるんだ。今日貰った銀貨もこの人から貰ったんだよ」

誇らしげにポケットから銀貨をだすイダテ。

「それって、これか？」

イダテにつられるように、ポップもポケットから銀貨を取りだす。二つの銀貨が揃った時、イアンは合点がいったと言わんばかりに両手を打った。

「そうか。銀貨を二つねだったのは、友達のためだったんだな」

ポップは驚き、イダテを見た。言っていた事と違っていた。

「おじさん。それは言わない約束だったでしょ」

慌てふためいて、イダテは二人を交互に見た。

「お前はすげえ友達思いの良い奴だな。なあ、坊主の友達。こいつを大事にしてやんな」

言われなくても、ポップには分かっていた。だけど、決意を込めて頷き、イアンに答えた。

「それでだ、なんでこいつらがお前らと一緒にいるんだ？」

イアンは『こいつら』で視線をローテに移し、『お前ら』でイダテとポップに視線を移した。

イダテは言いあぐねた。おじさんが警備隊、それも副隊長だって分かってから、自分が盗みをずっと働いていた。とは言えなかった。言ったら、失望されてしまうのは目に見えていたから。

イアンの眼差しがイダテに向けられるとともにイダテに罪悪感が溜まっていった。

やっぱり僕、居なくなつたほうがいいのか？

沈んでいく気持ちを知つてか知らずか、それを吊り上げるように頭をわしづかみにされた。

ローテが二人の頭を掴んでいた。

「この子達は、今捕まつてるギャングの使い走りをやらされていたんです。引つたくりとか、盗みとか。そうでもしなきゃ、生きていけなかったから。現に私も鞆盗まれてしまつて。せつかく、ソルやセレンからお金を盗んで買った鞆なのに」

「やっぱり盗んだじゃないか」

「お姉ちゃん、最低」

言うやいなや。目ざとく、双子は姉の失言を見逃さなかった。矢継ぎ早に繰り出される言葉に、しまったと、言わんばかりにローテは顔をしかめた。

「ちよつと、待つて！ 今のは、言葉の綾つていうやつ！ 聞かなかった事にして！ あっ……二人とも。この前欲しい物上げたじゃない。ね、ね？」

『それとこれとは関係ない！！』

彼らは、決して揚げ足をとるような真似をしていない。と思つていた。

ただ、姉が盗みを働いた証拠が欲しかったのだった。高価な品物を盗む専門の魔術師のくせして、家族のはした金をちよるまかす姉を。

まるで、政治家が失言をしたように、慌てて言い繕うローテをイダテは見上げた。

なんで、なんで言つちやうの？ おじさんに幻滅される。

ただの意地汚い泥棒だ、つて。

「本当か？」

それ以外の言葉を失つたかのように、漏れ出たように、イアンは問う。

躊躇して、イダテは頷いた。そのままの姿勢でイダテは固まつた。

イアンの顔を見たくない。

もう結果は見えていた。

「すごいな」

イダテの予想と違う、感心したような声。

恐る恐る、罨を警戒するかのように、イダテはすくめていた首を上げた。

「坊主、この魔術師から物を盗んで、逃げ切ったんだろ？」

イアンの声は何故か弾んでいる。

「はっ、はい」

どうして、怒らないんだろう？ 泥棒なのに。悪いことしたのに。

「これは、傑作だ」

この街全体に響くかのような、拍手を一回。たかが一回だけなのに、空気がびりびりと振動した。

「イアンさん笑いすぎ」

「お前が盗まれる場面を想像できない。だけど、坊主はやったんだ」
頬をわざとらしく膨らませるローテと親しげにからかうイアンだった。

「気に入った。親の顔が見てみたいな」

何の気無しに呟く。

みるみるうちに、イダテとポップの顔が曇っていく。

「どうした？」

「イアンさん。デリカシーがないですね」

呆れたようなローテの声。イアンは彼らがどうしてこうなったか理解した。確かに、この歳で使い走りさせられているような生活を強いられているならば。親は無関心を貫いているか、もしくは……。

「親がいないのか？」

そう問われるのが、彼らにとっては負い目となっていた。他の奴は帰る場所があるのに、自分達にはなかった。暖かい食事も、無償で渡される愛情も。安心できる場所も。

お前には、分かるもんか。と睨みつけるような視線が彼らの答。

それを、イアンは正面から受け止めた。逃げも隠れもしない。警備隊副隊長の肩書きに賭けてよりも、彼自身の生き方だった。

まっすぐにしか生きられないから、辛酸も泥水も数え切れないほど身体に浴びてきた。

「こいつらの行くあてはあるのか？」

「私が引き取ろうと思います」

「お前の職業で、こいつらを養えるのか？」

「養えるから、そう答えました」

「一気に四人に増える訳だか」

「回りくどい。単刀直入に言えませんか？」

「あの坊主をうちのガキにしたい」

イアンの要求にローテは、別に驚いた表情を見せない。淡々としたそれに感情は表さない。

「イアンさん」ため息と同時に「この子達はこの子達の意志がある。私にそういわれても、返事は返せない」

「ヒルト、今年でいくつになる？」

「十八ですけど……」

矛先を変えた質問の意図がローテにはわからなかった。

「まだ、俺の半分しか生きていないじゃないか。それで、お前以外の四人を養うのか？」

「何が言いたいんですか？」

困惑よりも苛立ちが雑じるローテの口調。

そんな年若い彼女をいなすかのように、イアンは一息置いて言った。

彼女の二倍生きた、その経験を込めて。

「お前くらいの若さで、四人を背負うのなら……そうならば、それは重過ぎないか？」

「そんな訳無い！」

拒絶するかのように叫ぶ。自分自身、思ってもみない行動に、ローテはふと我にかえる「私にはできます」とだけ付け加えた。

「自分の物買うために、自分の親しい人間の金盗むくらいなのにか？」

「フィル……」

「少しくらい、強情っ張りを治したらどうなんだ」

「私は、魔術師よ。足りないお金は金持ちから盗むわ」

「お前、それは本心から言っているのか？」

ローテの中身を掘り進めようとするような、イアンの問い。じつと静かに、けれど動物が敵に対するような威圧感を向け続けているような緊迫感が充満していた。

饒舌を飛ばしていたローテの口が動かなくなる。

「そんな硬い顔を見せるな。せつかくの美貌が台なしになるぞ」

肩の荷物を下ろしたように、イアンの口調が穏やかになる。

「実際、こいつら二人とも魔術師になったら大変になるからな。警備隊に一人入れたかったただけだ。それに子供もいない。どうだ？ 坊主。うちに来ないか？」

イダテは返事を迷っていた。彼自身はどちらでもよかった。けれど、できるならポップといたい。

いい機会じゃない。とローテが言う。

「イアンさんのとこに行っても、何時だってポップには会えるわ。」

イアンさん、君の事、十二分に可愛がってくれるはずよ」

後押しするような言い方。ポップは信じられないとでも言うように、ローテを睨んだ。

「僕は……。わかりました。おじさんについていきます」

イダテは、彼等の言いたいことを充分に理解してしまっていた。長い間、ギャングの中にいたせいで、俗に言う『空気を読む』のに長けてしまっていた。

「イダテ……」

掛けられる声さえ考えられない。これじゃあ、大人の都合じゃないか。

そうか、とイアンは破顔する。「そうと決まったなら、こっちに

来い。イダテ！」心底嬉しそうに彼を招いた。

イアンの元へ掛ける前。イダテは、ポップの方向に振り向いた。

「いつも一緒だよ」それは、別れの挨拶とは程遠く、微かに困った表情。

イアンには見えない角度だった。

イダテは駆け寄る。

「もう一度だけ、自己紹介だ。俺は、イアン。イアン・ブルームス。イダテはイダテ・ブルームスになるんだな。よろしくな！」

子供が産まれたように、弾ける笑顔を見せていたイアンに対して、戸惑うような表情を浮かべていたイダテ。「どうした？」と訝しむような声をかけられて、ようやく「お願いします」と言った。浮かべた愛想笑いに。

どうして、素直に笑えないんだろう？ とイダテ。もう一歩が上手く踏み出せなかった。

せっかく、望みだった家族の中に入れたのに。

14th：双子が添える彩り

気まずく、渴いた雰囲気相場を支配した。さっきまで、あんなに嬉しがっていたイアンでさえも、何を言えはいいのか分からず、黙り込む。

だから、彼らのため息は、吸い込まれるように、音を残して溶けていった。

張本人は、双子。

「なんか、変な感じ」

「だね」

水を注すように双子が言葉を紡ぐ。しかし、それは波紋を描くように皆に聞こえた。

「イアンさん。そんなにすぐに決まっちゃうなら、イダテ君も困るよ」

「私達だってお姉ちゃんと出会った時は、ぎこちなかったから」

「そうか？」とイアン。

双子は揃って頷いた。

「ずっと」

「泣いてばかりで」

「そのたびに」

「お姉ちゃんを困らせて」

「正直」

『思いついたくない』

まるで掛け合いのように交互で喋り、朗らかに笑っていた双子の顔に陰が射す。それもつかの間。すぐに、晴れあがった表情に様変わった。

「そんな僕らでも」

「こうして、笑ってる」

『だから』

「彼らも笑う事が出来ると思うんだ」

「私達みたいだね」

「だから、こんな場面を鮮やかに変えて見せる」

「それが、私達の役目だったりするけど」

二人ともが一步踏み出し、双子のどちらかが彼らに呼び掛ける。

『とか言っておいて、自分達から動くけれどね』

双子は、数歩だけ動く。ちょうど、屋上にいる人誰にでも、等距離になる位置に。

「袖に注目」

ソルは着ていた上着を脱いで、ハンガーに架けるように肩を持って吊した。

「出てくる？」

不安そうな物言い、の割には自信に溢れた顔つきのセレンだ。

「ほら、ゴエモン。出番だよ」

セレンが、パンパンと袖元で二回、目覚ましのように手を叩いたけれど、何も出てこない。沈黙を保ったまま、数秒が過ぎた。

あれ？ と双子は首を同時に傾ける。

『ゴエモンは？』

「もしかして」

ソルが片手で上着を逆さまに吊した。地面を向いた右手の袖を二三度、埃を掃うように波立たせた。

そうすると、肩口がもぞもぞと動いた。真ん丸に膨らみ、そのま

ま、するりと袖から降りていく。
マッチ棒のような足が二本、飛び出した。だが、姿を現すと思っ

たら付け根の辺りで止まった。

足が苦しそうにじたばたと円を描く。合間から、白色の羽根が何本か宙を舞い踊る。

「ゴエモン？」

「もしかして……」

『太った？』

双子が声を合わせている間にも、苦しそうにもがく足が段々と力を無くしていった。

「わぁ！ もう少し辛抱してよ！」
セレンが叫ぶ。

「少し落ち着くんだ。ほら、もう大丈夫だから」

ソルは、両手で持っている上着を放す。けれど、中空に浮いたまま、上着は地面に落ちなかった。

宙に浮いている上着の襟元に、両手をつっ込んだ。ズボンを穿くように手を動かすと、それに合わせて丸い物体が上がっていく。袖口から見えた足はもう見えない。

ソルは、卵を扱うようにそれを取り出した。そして、両手のひらをくつつけ、上に向けて足場をつくり、それを乗せた。

汚れない、純粹で清らかな白色の羽毛を持つ丸々とした鳩だった。くちばしと瞳の黒が目立っていて、驚いたように両方とも忙しそうにキョロキョロと動く。それにつられて、首がピストン運動を繰り返す。

そうしながらも、首を左右に動かして、呼び出した二人を見る。それにつられて何かが揺れた。

首にかけられたのは、笛だろうか？

「ゴーエモン！」

「大丈夫だった？心配したんだよ？」

鳥は、首をすくめて双子の反応に答える。

「二人とも」くちばしを上下に震わせて、鳥が喋った。「私は成長期なのです。太ったなんてことは言わないで下さい」

「でも、ゴーエモン」

「昨日、ご飯いっぱい食べてたよね？」

「こ、これと、そ、それとは、は、話しが別です」

鳩は、慌てたように言葉に詰まった。

「鳩が喋った？」

「よね」

双子のように、言葉を繋ぐポップとイダテ。

心なしかピストン運動が速まっていた鳩が、落ち着いたそぶりを
見せて、彼らに首を向けた。

「鳩が喋ってはいけない、なんて決まりはありませんよ。お坊ちゃん方」

鳩らしからぬ丁寧なそして、滑らかな喋り方。

「はじめまして。私はゴエモン。名は、飼い主様から頂きました。
あだ名は、なんとも。余りに掛け離れていなければ、了承しまし
よう」

ソルの手の平に乗って、ゴエモンは軽く首を振りながら自己紹介
をした。

「挨拶がわり」

セレンが言う。何も起こらない。

「ゴエモン？」

鳩はそっぽを向いた。

「怒ってる？」

ソルの問い掛けにも同じ動作だ。気のせいかな、丸い頬がさらに丸
々と膨らんでいるように見えた。

「熟睡しているところ、あんな風に叩き起こされたら、誰だって悪
態をつきたくなるでしょう。うだうだ文句を言わないだけでも、感
謝するべきです。それに太ったなんて濡れ衣を着せられるのですか
ら」

二本の足を器用にも、時計の針が回るように動かして、背を二人
に向けてソルと対面する。ソルは、答えるかのように、両手を水平
に保ったまま高く上げ、ゴエモンをまっすぐに見つめた。

「そう言っても、ゴエモン」

ソルは口元を吊り上げる。

「今、夕方だよ」

「はいっ？」

セレンの言葉に、ゴエモンは首を捻った。

「今が夕方な訳があるわけないでしょう。私の体内時計は鳩時計よりも正確だって……」言っている最中に、ゴエモンは空を見上げた。鴉が甲高く鳴くのが似合うような茜空とちぎれ雲。沈む太陽は、紅かった。

朝日は紅いだろうか？

ゴエモンの顔が豆鉄砲をくらったようにみるみるうちに、変化する。

「どんな手品を使っただんです？」

大まじめに尋ねる、鳩が一匹。

「それは、『夜ふけまでゴエモンと手品をやったら鳩時計がずれてしまったのさ』って感じかな」

「うん。それでいいんじゃない」

ただの寝坊だというのを、オブラートを包んではぐらかした。

「そうですね。それなら、良かったです」

疑う事なく安心するゴエモンもゴエモンだ。

「んじゃ。手品始めようか」

「ここで、うまくいきますか？」

「うまくいくに決まってる」

そうですね。と鳩は、何も言わずに首を前に傾けた。くちばしで首に掛けた紐を手繰りよせる。すると、笛までたどり着くとそれをくわえた。

首を後ろへと反らし、その反動で前に突き出し。

笛を高らかに、吹き鳴らした。

のに。

音が全くしなかった。

「お兄さん。音が鳴らないじゃないか」

ポップが口をとがらせた。

ソルは、ゴエモンを両手に乗せたまま笑う。

セレンが代わりに答えた。人差し指を横にして、唇を隠して。

ポップが彼女の仕草通りに口をつぐむと、セレンはその手を耳に

沿え、音が集められるように囲った。

彼女の示す通りに二人は、耳をそばだてると。微かな異音が聞こえた。右から。左から。上から。四方八方からそれが近づいてくる。

と、地面の色が橙から灰色へと変化した。

天気が変わったのかと、二人は空を見上げた。

彼らがそうすることをまえもって知っていたのだろうか？

同時に、突風が地面にたたき付けられる。

見上げた彼らは、突然のそれに思わず目をつむる。風が止み、目を開くと。

辺り一面が白を中心とした色に様変わり。

鳩が所狭しと整列していた。

ゴエモンを中心に、まるで半円を描くように。

二人は息を飲み、その光景をじっと見た。すごいと、自然に声にだしてしまう。

鳩の一群を見回したゴエモンがどうだと言わんばかりに胸を張った。

「だけどな」今まで、沈黙を守っていたイアンが声を発した。「これは手品か？」苦笑混じりの声色。

「手品っていうのは、人が驚けばそれはそれで成立すると、僕は思う」

しどろもどろにもならないで、流れるように言うソル。まるで、それが身上であるかのように。

「けど、これで、手品になるかしら？」

セレンはソルに近づいて、ゴエモンの嘴に手をかざした。

手が嘴から離れると、ゴエモンはいつの間にか、葉を加えていた。「こんなものでどうでしょう？」

セレンの手には、今までゴエモンが加えていた笛が握られていた。

「流石」ローテが、拍手して軽い音色を響かせた。「私の弟妹ね」

双子は得意そうな顔をローテに向けた。

セレン、とゴエモンが呼び掛ける。

「笛を返して下さい。彼らを帰さない」と

彼らとは、呼び寄せた鳩のことらしい。

そうね。と、彼女は笛を嘴に加えさせた。直前。ゴエモンの顔が戸惑いを見せた。

人間には、到底とれなさそうなリズムで、リズムカルに笛を吹き鳴らすゴエモン。その音色を聴いた鳩達は、一様に首を斜めに傾げて、それでも納得がいかないといった様子でそれぞれ飛び去った。

最後の一羽が飛び去って、数秒。ゴエモンがソルの手の上で溜息をついた。

「また、彼らにエサを奢らなければ……『また、しょうもない事で』って信用を無くされてしまいます」

指揮する者の悲哀を感じた。

というよりも、そんなに大変だったのか。鳩の社会は。

「すまない。ゴエモン」

申し訳なく、ソルがうなだれた。

「いいんですよ。観客に喜んでもらえれば」うつむくソルを見上げ、翼をはためかせるゴエモン。「鳩をまとめるのは、私の領分ですから……って」ゴエモンが声を荒げた。「全然反省してるって顔じゃないですか!」

「ゴエモンだって、深刻に考えてないだろ?」

「鳩の世界にも政治力はあるのです」

「ゴエモンに匹敵するような鳩さんっているの?」

セレンの問い掛けにゴエモンはしばし沈黙した。

「……いないですね」

「だったら、大丈夫よ」

「ゴエモンが、普段通りにやってれば嫌われる訳がない。僕らが保証する」

それは有り難い。ゴエモンは、そうとだけ呟くと首を傾けた。そ

れにつれ、瞼が瞳を覆い隠していく。

3時の方向に頭が向いた時、突然、電気が走ったようにゴエモンが震え、直立した。

「まだ眠いので、これでお開きにさせて下さい」

「ゴエモン。ご褒美は？ どうしよっか？」

「抜きでお願いします。やっぱり、太ったなんて言われてしまうと、気にしてしまいますから」

ゴエモンは、双子の返事を聞かずに、ソルの上着に近づいた。

首の部分に足を入れると、膨らみがするすると入っていき、背中の部分が盛り上がる。それもつかの間。風船が萎むように、膨らみが消えていった。

15th：子供達は。

騒ぎ立てるように、集まっていた鳩達がいなくなる。屋上には静けさが残された。気まずいような雰囲気は彼らが運び去ったかのようだった。

かわりに残っているのは、見たこともないような光景に心踊った、子供二人の興奮した様子。

すごい、と目を輝かせて口走ったのは、意外にも大人しく、落ち込んでいた様子のイダテだった。勢いそのままに、双子に駆け寄って。

「お兄さん、お姉さん。かっこいい！　どうやったの！？」
荒い鼻息を隠そうともしなかった。

「ありがとう」

イダテと目線が合うように、膝を折り曲げたセレンが微笑む。

「だけど」ソルが、右手で口の左端をつかむ真似をする。「種は教えられないな」口にチャックをするかのよう、左から右へと手を滑らせた。

「僕にも出来ますか！」

『もちろん』

双子は、声を合わせて答えた。

「それなら、僕らの所に遊びに来れば？」

「そうしたら、色々と手品教えてあげるよ」

「でも……」

「イアンさんの家と僕たちの家って近くなんだ」

「だから、いつでも会えるよね」

えっ。イダテは頭の中が真っ白になった。

お互いの家は、とても遠いんだって勝手に決め付けていたし、このせいでポップとも滅多に会えないと思っていたから。

「それじゃあ。ポップと離れ離れにならないの？」

「そういうこと」

イダテは、ポカンと口元を開けて一瞬、静止した。目をしばたき、右手をぎゅっと握りしめた。

「ポップ。僕たち、離れ離れにならなくて済むんだって。やった！」

イダテは、ポップの方向へと振り向いた。その顔に満面の笑みを浮かべて。

「ああ。よかったな」

イダテの気分のあまりの様変わりように、すぐにはついていけず、生返事のようにしか返すことのできないポップだった。

「で、ポップ君は、手品どうだったかな？」

ソルがそう言うと、ポップの右頬が無意識のうちに震えた。

「今、なんて？」

「面白かった？ パップ君？」

セレンが悪意などありえないような、笑みを浮かべて問う。

「俺は、ポップだ！」

両頬が引きつり、勘忍袋の緒が切れた。噛み付かんばかりの大声で叫んだ。

口を、拳が入りそうな程目一杯に開いたまま。

それを、ソルに両端をつかまれた。そのまま、上に吊り上げられる。

「はふ？ はひはっへふふんはよ！（なにやってるんだよ！）」

「怒らない、怒らない」

「どこかの大人みたいに、苦虫噛み潰すような顔してちゃだめだよ。ポップ」

ソルが頬から両手を離すと、ポップは頬を素早く触った。

「ちゃんと、俺の名前言えるじゃねーか」

「うん。わざとだもん」

あっさりと肯定するセレン。

「わざと。って……」

「こうでもしなきゃ、ずっと固い顔のままだっただろ？ 今の顔の

「ほづがずつといいね」

「今、すんごい怒ってるんだけど」

悪かった。そう言つて、ソルは右手を差し出した。「仲直りの握手」

元はといえば、双子が仕掛けてきたのに。微かにそう思ったが、ポップはその手を握り返した。

「簡単には許さないからな……兄貴」

「今、なんて？」

「あ、に、き、つて言つたんだ！」

今にも食いかからんとするかのように、ソルにわめき立てた。勢いそのままに、睨みつけた。

睨みつけられた彼は、きょとんとポップを見ていた。意外な事が起きたかのように。

「あんた、これから俺と暮らすんだろ？ だから兄貴って呼んだんだけど」

怒鳴つた後の反応があまりに普通だったから、ポップはだんだんと声が尻つぼみになっていった。

じつと睨み付けていたその視線を外す。何処へ向けようか、困惑した。とりあえず、斜め下の地面を見つめた。

熱くなってしまった。その後の結果は目に見えていた。ギャングの中では、そうすることで疎まれていたから。

怒鳴つても、握り続けていた右手が、また強く握られた。

ポップは逸らしていた目線を元に、とはいかなかったけれど、ソルの顔が見える程度に微かに戻した。気弱な上目遣い。

不愉快ではなく、愉快であるかのように目をいたずらに開き、頬を吊り上げる彼の姿が目に入った。

「な……んで？」

怒らないんだよ。それは、彼は口にしなかった。

顔が崩れないように意識するのに一杯だった。まばたきをしただけで、壊れてしまいそうだった。

「面白い。まさか兄貴って呼ばれるだけで、こんなに怒鳴られるとは思わなかったな」

ソルは、まだ力強くポップの手を握っている。しかし、それは怒っているからではなく。まるで。

新しくできた絆を確かめるように。

その手は

とても、とても

強く

優しかった。

「とりあえず。ただだけど、よろしく」

「あ・・・ああ」

言葉少なめに、ポップは答える他なかった。これ以上の言葉を紡いでしまったら、感情が溢れてしまいそうだった。

「じゃっ。これからどうしょっか？」

セレンが言う。

「イダテ!？」

ポップは目をこれでもかと見開いた。

イダテが、後ろからセレンに抱きしめられていた。とはいっても、身長差があつたから、実際はイダテの両肩口の上からセレンが両手を入れて、彼の臍の辺りで交差していただけけれど。

サスペンダーを前にしたような格好になったイダテの顔は、これ以上なく朱くなっていた。

年上の女の子に、そのように抱き寄せられているイダテに、ポップは嫌でも、嫉妬を覚えてしまう。

「イダテ君。何かいい案ある？」

イダテの頭に乗せていた顎を、セレンは彼の肩の上に移動させた。勿論、彼女の甘い吐息がイダテをくすぐった。イダテは、ますます顔を朱色に染めて黙りこみ、さらに俯いてしまう。

女の子に対する耐性を彼はまだ身につけていなかった。

イダテは、ぼそぼそと言葉にならないような音を発した。そうし

ている合間にも、頭のとっぺんから湯気が出ていきそうだ。

「かーわいいっ」

セレンは、そう言いながら、餅をこねるようにイダテの頬を撫でる。彼は、カミナリに撃たれたかのように震え、蛇に睨まれた蛙のように、固まってしまった。

「そういうセレンは、何か名案があるの？」

ソルが問う。

「ううん。なんにも」

セレンは、イダテの顔に寄せたまま、ゆるりと首を横に振った。

「どうしょつか？」

双子は、見つめ合った。共に、眉を寄せて思案顔になる。まるで、鏡を合わせたかのように、双子の顔がますます似ていた。

「イアンさんの家で、パーティー開けばいいんじゃないの」

悩む彼らに意外な方向から助け舟が舞い込んだ。双子は傾けていた首をローテに向けた。

「姉さん」

「ミアナさん、今日ご馳走作るんでしょ？ それだったらそれに便乗してもいいと思うな」

ミアナは、イアンの奥さんの名前。

「いいね、それ。流石、お姉ちゃん」セレンが合点がいったと言うように、両手を叩いた。「イアンさん、それでい……」

イアンの立っている方向に振り向き、双子は絶句した。その反応が気になって、ポップもイダテも同じ方向に首を向けた。

警備隊の二人が向き合っていた。ただ、その温度はひとまず一段落した彼女らとは違った。

イアンは、仁王立ち。

フィルは、上司よりも高い背を縮こませて。

16th：終わりの始まり

「だから、あれだけ手帳に予定を書いておけ。と言ったんだ。そう
でなくても、お前は忘れっぽいだろうが」

イアンは腕を組み、ため息をついた。それでも不正を見抜くよう
な鋭い目つきは変わらない。先程の明朗な雰囲気を一変させて、副
隊長の威厳と厳しさを出していた。

「ごめんなさい」

「すみません。だろ」

「すみません」

イアンに口調を注意され、フィルは心持ち、ますます身体を縮め
てしまったように見えた。

「僕、大丈夫かなあ」

イアンのあまりの怒りっぷりに、イダテは思わず不安を口にだし
てしまう。

「大丈夫よ、イダテなら。イアンさんは、悪いことしない限りは怒
らないから。あいつは、しょうもないヘマばかりかするんだから」

「でも」

イダテ自身、自分は失敗ばかりしていると思っていた。盗みなん
て、何回失敗したか分からないし、他の事なんて数え切れない。

「イアンさんは、むやみやたらに怒らない。まして頑張ったなら、
結果がうまくいなくても、誉める人だし」

「でも……」

「この『魔術師』から鞆を盗んだんだから、誇りなさいよ。私から
そつする奴は、ひと味違うに決まってるんだから」

「は、はい！」

イダテは、セレンに抱きしめられた時以上に固まった。明らかに、
ローテは悔しそうだったから。猫のように細めた視線だけで、殺さ
れそうだった。流石、現役の魔術師。

「それにしても、長いなあ。あいつ、どんなにハマしたの？」

ローテの不満は、明らかに二人に向いていた。当て付けのように声を大にした。それなのに、彼らは気が付く様子を見せない。説教が続く。

ソルを呼ぶ。

「何？」

「トランプある？」

「あるけど」

ポケットを探り、ケースを取り出した。

「一枚ちょうだい」

絵柄の指定は？ と、ソルが大袈裟に尋ね、御自由にとローテは答える。

一番上に重ねられたカードをめくり、うやうやしくローテに渡す。右手で受け取った彼女は、人差し指と中指でカードを挟んだ。親指の爪が肩に触れるまで右腕を曲げる。肘を警備隊二人のいる方向に突き出した。

「お姉ちゃん！ 危険だよ！」

「大丈夫よ。二人とも現役だし。これが避けられなかったら、警備隊の恥になる。絶対に」

そうしたら必ず言いふらしてやるもんね。慌てる妹を傍目に、ローテはニヤリと笑った。左目をつむり、肘先を微かに動かした。

子供二人は、そんな彼女の仕草に息を飲み、目を見張った。

肘から先がしなる。

鞭が振るわれた時のような、空気を鋭く切り裂く音が響く。指に挟んでいた、カードが円形の残像を残して飛んでいく。狙い通りに。

「っ……危ない！」

最初に、気付いたのは説教されていたフィル。説教に飽きて、注意が他に向き始めていたのかもしれない。

フィルは、背中に羽織っていたマントを二人の前に投げ出した。

黒色の幕が二人の目の前に広がり、飛んで来たカードを迎え入れる。それでも、カードの勢いは止まらなかったようだ。ぶつかった箇所が突き抜けようとするかのように盛り上がる。

目の前に投げ出されたマントは、押し戻されて地面へと落ちた。

沈黙。

「よく気がついたな。フィル」

イアンが静けさを取り戻して、呟いた。

「伊達に、訓練は積んでないですよ」フィルは、そう答えて地面に広がるマントを拾う。片手で摘んで持ち上げると、真ん中の生地が互いに斜めにずれた。そうしてできた隙間からは、向こう側が見える。「あーっ！ 切れてやがる！ 大事にしたのに……」フィルは、力無くうなだれた。

「けれど、お前がこうしなければ、俺かお前。どちらかが怪我をしてたな」

イアンは右手に挟んでいた物を、ローテに投げ返した。彼女が投げたランプ。今度は、中空を切り裂く事はない。床を滑り、ローテの足元にたどり着く。札を表にして。

スピードのエース。

彼女の投げた札。

「ローテえ。お前って奴は……」

フィルが涙目で睨み付ける。

「警備隊続けてれば、いつかは破れるじゃない。そう考えれば、今破れてよかったんじゃない？」ローテは、飄々と言う。「それに、いつだって奇襲に備えなきゃ。警備隊つていないし？」

「にしても、やり過ぎだな。そこまでする必要はあるのか？」

イアンの問いに、ローテは頷く。

「せっかく、新しい家族が出来たのに。仕事熱心もいいけど、ここで説教するのもどうかと思って。やってみました」

テへと、舌先を突き出した。なまじ、彼女が美人なだけに様になりすぎている。可愛かった。

「それもそうだな」

あつさりと、イアンは引き下がる。「で、用はなんだ？」

「せっかく、二人が新しく家族になったから歓迎会開こうかな、って思っただんですけど。イアンさんの家でやるのはどうですか？ ミアナさん。今日、腕によりをかけて料理するんでしょう？」

「そうだが。量が足りないし、あいつだけでは到底捌ききれんだろう。そこは、どうするんだ？」

「それなら」

「私達が手伝うよ！」

双子が話に割り込む。

「それに、帰り際にお店で材料揃えれば、全部解決するし。この際、警備隊の皆も呼んだらどうです？」

「名案だな。どうだ？ イダテ、ポップ？」

イアンが、子供二人に尋ねると、二人は揃って頷いた。いくばくかの不安が残っていたけれど。見知らぬ顔が一気に増えてしまうなかで、彼らとうまくやれる自信がなかった。それが、自然と顔にでてしまう。

「心配しないで大丈夫だ。奴らは宴会好きだからな。お前らもすぐ楽しくなるぞ。うちの新人りは、皆そうやって溶け込むからな。なあ、アクイース」

「そうっすね」

イアンが、フィルの背中を景気よく叩く。自然に、フィルの答えも気分良いようになる。

「俺達、騒ぐときは騒いでやる時はやるんだ」

フィルの言葉に自信が満ち溢れていた。それだけ、仲間を誇り、信頼している証拠だった。

二人は、彼らがそこまで自信を持って語る、彼らの仲間に、自然と興味を抱いた。

「それならさ」

「行こうよ。イアンさんの家ってびっくりするくらい広いんだから」

双子が、彼らの手を取る。彼らも、無理矢理引つ張られるのではなく、自分から足を動かした。

「でも、兄貴」

「どうした？ ポップ」

ほんの数歩、歩いたところでポップが足を止める。ソルに声をかけて、怖ず怖ずと彼を見上げた。

「俺、姐御に話があるんだけど」

「姐御？」

ソルも、同じく足を止めていたセレンも、いや、屋上にいた誰もが首を傾げる。『誰？』空気がそこだけ止まってしまったように、凍り付く。

四方八方からくる、疑問の声にポップはたじろいだ。

「魔術師だよ」

ローテの名前を呼び捨てにするか、さん付けにするかどうかどうしようか、一瞬悩んだ彼は、通称で彼女を呼んだ。しかし、その声は唾を吐くように投げやりで、ぶっきらぼうだった。しかし、今にも消えてしまいそうだった。

「私？」ローテは、悪戯っぽく自分を指差す。「なんだが、マフィアになった気分。この際、ヒルト一家でも名乗ろうかな？ ちょうど私、犯罪者だし」

姐御と呼ばれて、浮かれたように喜ぶ彼女。

大好きな人に告白するよりも、ポップは恥ずかしくなった。

「ダアーツ！ いいだろ！ 姉貴って使っちゃまったんだから！」

ソルと握った手も上下に揺れる程、ポップはじたんだを踏む。

「ポップ。面白い」

笑いを堪えているソルを悔しそうに睨み付けるポップの目尻が潤んでいた。

「お姉様とかお姉でもいいんじゃない？」

火に油を注ぐかのように面白がっていた。

ポップは、歯をぎりぎりと鳴らした。

「別になんでもいいだろ？」 そっぽを向き、ふて腐れた。

「うん」 今までの出来事が嘘でした。 とも言つかのような、ローテの態度に思わずこけそうになる。

「なんでもいいのかよ…」

「大王でも魔王でも女王様でもなんでも大丈夫」

全部、王様だ。 さりげなくファイルが思ったのは言うまでもない。 心にしまっておく。

「で、どうするの？」

「どうするって」

イダテの前で尋ねられる質問ではなかった。

「ソル、セレン。 あんた達先に行つててくれない？ ポップは、私が連れていくから。 後、鞆持つて行つて。 玄関に置いて頂戴」

ポップの気持ちを知つてか、知らずか。 ローテはそう指示した。

何も知らない彼らは、疑う事なく了承する。 そして、ローテから投げられた鞆を受け取る。 全てのきつかけとなった鞆を。

「分かった。 それじゃあ、行こう。 イダテ」

セレンがイダテの手を引き、また歩きだす。

「ポップ…」

突拍子のない提案をした彼を、イダテは不安に感じた。 もしかしたら、二度と会えなくなるかも。 と。

心配そうに見つめるイダテに、ポップは大丈夫、と自信を持っているように頷いた。

それを見ても、まだ不安は募っていた。 けれどイダテは、セレンに引かれるようについていった。

屋上から、また一人、一人と人が消えていく。

ポップの眼前には、手摺りに寄り掛かるローテしか見えなかった。

17th：彼女の描いた真相

階段からの残響が聞き取れない程度までに小さくなる。彼らの気配がなくなると、ローテが先に口を開いた。

「私の名前が聞きたいんでしょ？」

ポップは眉を潜めた。

「わざわざ、魔術師なんて言ったんだから。いい？ もう一回言うから」

「ローテだろ？ ローテ・ヒルト」

「なんだ。知ってるじゃん」ローテは素っ気ない。

「姐御の……って、そう言っただけでにんまりすんなよ！」

「だって、やっぱりこそばゆいし」

「調子狂うなあ」

ポップは軽く咳ばらいをした。本題に入ろうとする前に、彼女を睨み付ける。彼が今から質問する事に、ふざけて答えられなくなかった。

「なんで、嘘ついたんだよ」

「嘘？」

睨み付けられても、ローテはまだ涼しい顔して立っている。

「どうして、イダテを殺さなきゃ家族にしないって言ったんだよ」

「ああ、それ？」

心底、どうでもいいとでも言うような、ローテの態度。身構えていた身体を手摺りに預けた。

「あんたは、イダテを絶対殺さないと踏んだから。絶体絶命だった私を助けようとしたから」

暇になった右手で首筋に流れる髪を梳く。

「俺は、出来るだけ、約束は守る」

「守らない約束もあつていいんじゃない？」

「はっ？」

「私は、そうやって生きて来たから」髪を梳いていた右手を止める。
「約束は破るためにある」ゆっくりと手摺りに預けていた体重を戻す。

彼女の言っている事は、無茶苦茶だ。約束は守るためにあるものだ。ポップはそう信じていた。そうしなければ生きていくことができなかったから。

しかし、ポップは言い返せない。いや、言い返したらいけない気がした。今まで、真面目とはいえない様子だった彼女が纏う異様な雰囲気。魔術師 - この街。いや、国の中でも数人しかいないS級犯罪者 をやっている威圧感。

「もし…」そうでありながら、ポップは言葉を探す。「俺がイダテを殺してたら…」「もちろん」全てを言い終えない内に、ローテは言葉を被せた。「君も、彼の後を追うはず」

冷ややかに断言する、彼女の言い方にポップの背中に寒気が走った。

「はっ……？」

「言わなかった？ 私は、修羅場で一度も嘘を言ったことがないの。それに…」

彼女は、口元を醜く曲げる。

「そうになったら、私が君を殺す。そうでなければ、『魔術師』なんて道化、やっていけないもの」

彼女は、笑っていた。

笑っていただろうか？

微かに覗き見る悪意。

底が見えない、暗黒。

後ずさるポップに立ち向かう気力はなかった。

しかし、それを咎める理由も存在しない。批判もできない。

目の前に立ってみれば分かる。

ギャングに立ち向かう時とは一味も二味も違う。

孤独。

簡単に言ってしまえばそうだ。

実情？ 複雑に絡み合っている。彼女の場合、それは人よりも何重にも絡み合って。

誰にも解けやしない。

活動写真を切り取ったかのように静止する。

この場から、一刻も早く逃げ出したかった。ポップは、それでも、そうだとっても、逃げ出せなかった。影が足元に縫い付けられたように、動かない。

「ぼ……うず……坊主!!」

突然聞こえた怒鳴り声にびくと震えた。それがよかったのだろ
うか？ 動かなかった身体が軽くなる。

腰を回して、後ろを振り向いた。

「やっと聞こえたな」

屋上へ通じる階段の横の壁に腕組みをする年若い男。先程、イアンに雷をくらっていた警備隊員。

名前は、確かフィル。

イアンからは、アクイースと呼ばれていた。

あれ？ ポップはその名に聞き覚えがあった。フィル・アクイース？

「俺の顔になんかついてるか？」

フィルが訝しむ程に見つめていたようだ。

「あんた、フィル・アクイースって言うんだよな」

「そうだが？」

「どっかで会った事ねえかな？」

「ないな」

待てよ、フィル……

ポップにずっと見つめられている、フィル。居心地が悪くなり、組んでいた腕を組み直した。

金属が擦れる音が聞こえる。ベルトに挟んだナイフのホルダーが擦れた。

紺色の鞘に収められた刃を固める柄は紅色。
遠目からでも目立っている。特徴的な色遣い。

「あんた、まさか……」

「俺は、フィル・アクイースだ。それ以上、それ以下でもない」
遮るように言ったそれがポップを黙らせる。

「聞きたい事はこれで全てか？」

ポップはただ頷く。

「じゃあ、もう降りろ」

「だけど……」

「下であいつらが待ってる。すぐに終わると思ったんだろうよ。だから急いで、追い付いてやれよ」

「あ……ああ」

有無を言わせない迫力だった。だから、ポップは階段を降りることにする。入り口まで近づいて、フィルの横に立つ。そのまま通りすぎようとして。

「今の事は、誰にも言うなよ」

思わず掛けられた言葉に首を向けようとする。

「首を向けるな、それと……」

立ち止まったまま。次の言葉を待つ。

「友達は、大事にしてやれよ。出来なかったら……」

フィルは、言葉に詰まる。

「『黙殺』なんて、悪名で呼ばれちゃうようになるからな」

まさか……、駄目といわれていた首を曲げ、フィルを視界に入れようとする。

フィルは、ポップに興味がなくなったように、彼とは逆の方向に歩き始め、背を向けていた。

声をかける事も憚るしかない。ポップも階段を降り始める。

しかし、あの人が、ポップは驚くしかなかった。

『黙殺』フィル・アクイース。

ポップとほぼ同年齢で一団を立ち上げて、僅か数カ月で一大勢力

にまで築き上げた、伝説的存在。

魔術師に、黙殺、警備隊の副隊長。なんだか、凄い人達の世界に入ってしまった。

今更ながら、ポップは身震いをした。

18th: Is This Happy End??

屋上には、まだ二人が残っている。

これが、物語だとしたら、最初に現れた登場人物二人。

「あいつに言うような答えじゃないだろうよ」

一步一步、ローテに近付きながらフィルは諭す。

「お前らしくない。あんな姿、セレンにもソルにも見せた事ないだろ？」

ローテは、手摺りに寄り掛かったまま動かない。まるで、腹話術の人形のように俯いていた。赤髪が垂れて、顔を隠している。

「ローテ？」

フィルが立ち止まる。何か、雑音のような細やかな音が聞こえた。全ての感覚を集中させて、耳をそばだてる。

嘘つき。と言う言葉が辛うじて、理解できた。

もう一度、彼女の名を呼ぶ。彼女の呟きの意味が理解しがたかったから。

彼女は何も反応しない。ぶつぶつと、聞き取りづらい言葉の羅列を口にするだけだ。

そんな彼女の反応にフィルは困惑するしかない。啞然としたまま、数刻が過ぎたような、長い時間を感じた。実際は、数分も経たなかったが。

突然、ローテが座り込んだ。背中が手摺りに沿ってずり下がり、足は手で抱え込むようにくの字に折り畳んで……。

両手で耳を塞いでいた。耳に被る髪をかきあげることなく、それも気にせずに押し付けていた。

確かに、肌寒い季節だ。しかし、そうする必要がないくらいに、かくかくと震えていた。

俯いたままの顔からはつきりとした表情は見えない。が、異変がおこっているのは明白だった。

当然、彼は彼女の元に近付く。駆け足で。震える髪の一筋一筋が見える距離になって、しゃがみ込む。目と鼻の距離と言う程近くはない。ただ、手を延ばせば触れることができる。

手摺りがたわみ、鈍い音を発した。彼女が後ろへと僅かに動く。まるで、フィルに触れられたくないかのよう。その証拠に、俯いていた顔をさらに、下に向けていた。

身体をますます酷く震わせて。

「どうした？」

フィルは戸惑いながら、優しく声をかけた。耳を塞ぐ手を外そうと、右手をそつと伸ばす。

その手を、弾かれる。

「触らないで」

微かに顔を上げた。額から垂れ下がり、目元を隠す髪の毛から覗く目はとても鋭かった。全てを拒絶するかのよう。

フィルは黙り込んだ。

けれど、そのまま引き下がる彼ではなかった。

弾かれた手で、弾いた手を握りしめた。

手首を握られた彼女は、力づくで抵抗する。だが、腕力の差は埋められない。まして、相手は警備隊員なのだから。

黙る。

フィルは引き続き、空いた左手で、垂れ下がる髪をかきあげようとする。勿論、ローテもそれを阻止しようと残りの手を動かすが、叶わなかった。

「うく……」

ローテが呻く。

フィルは、左肘をローテの肩に押し当てた。彼女の手は届かない。「これで、どうだっ」

腕を前によせた分だけ、フィルとローテの距離が近くなる。

自由に動かせる肘先を上へと持ち上げて、髪を額へとかきあげた。あらわになる表情。

口をへの字に曲げ、唇を震わせ、噛み締める。三白眼になりながら、強がる態度を見せた。だが、肌が青ざめ、目元に涙が浮かんでいた。

「何、そんな顔してるんだよ。美人が台なしだぞ」

軽い調子で言う。こつちまで、暗い調子になる必要はない。

「あんたに何が分かるっていうの？」

何が、彼女を不機嫌にさせるのか？ フィルには分からない。ただ。

初めて会った時は、フィルがこんな顔をしていたのだろう。に。フィルは笑う。

「何が、そんなにお……きゃっ」

ローテは、狭い空間の中でも微かに身をよじる。「隙あり」

かきあげていたはずの左手をローテの胸元をかざしていた。防寒重視の服装をしていても、充分にその存在を主張している膨らみの上に。

けれど、直接触れるような真似はしない。

彼が彼女に抱いているのは決して、恋愛感情ではなかった。親愛だった。この行為だって、妹に悪戯するような感じだ。本気ではなかった。

彼女が元のような快活な態度を取り戻して欲しかったから。彼はそうした。

だけど。

「なんだあ」

ローテが表情を和らげる。

一時の間。

なんとか、表情をほぐすことができた。フィルは、安心して力を抜いた。

それがいけなかった。

「そうしてほしかったんだ」

妖艶な笑みを浮かべた。封じられていた両手を解き放ち、間髪いれず、フィルの首筋にまわした。

今度、声を漏らしたのは彼のほう。

ローテの唇が、フィルの声を封じた。顔と顔が近づき、緩やかに二人の身体が倒れた。上に乗るローテは、彼女自身の体重を利用して更に濃密に重ねた。

数秒の時間が流れる。

「意気地無し」離れた唇から唾液が糸を引いた。「舌、入れさせてよ？」

「誰が入れさせるか」

フィルは、齒を噛み締めて、彼女を防いでいた。

「照れてる？」

「そんなんじゃない」

「言つてたよね？『一晚、供にしたい』って。いいよ。今、相手してあげる。それに……」彼女は、顔をくしゃくしゃにして笑う。まるで、何かを搾り出すように。「私を慰めてよ」

フィルは、答えられない。息を切り詰め、鼓動が身体中を駆け巡っていた。理性が綱渡りをしている。踏み外せば、一線を躊躇いなく越えてしまう。

「もしかして」彼女は、上着をたくしあげようと、手をかける。「この姿じゃ、そそらないわけ？」

彼女は上着をたくし上げ始めた。

「あーっ！ 分かった！ 楽にしてやるから！ とりあえず、上着を脱ぐのはやめてくれよ」ぎこちない笑みを浮かべた。「俺は脱がす主義なんだ」

「そうなの？」

くびれた腰と、臍を見せて、彼女は上着を下ろした。

「ああ。それに、主導権は俺に委ねてくれ」内心、焦りながらもフィルは言葉を積み重ねる。「知らないのか？ 俺は、床上手で有名なんだぜ？ 俺に任せたら、お前なんて、よがり狂っちゃまうよ！」

「本当？」

あまりの調子良さに、訝しむローテ。

「ああ」

自信を持って、頷くフィル。本当は、虚言。ほらをふく。

「なら」ローテは手を離れた。「好きにしてよ」

目をつむった彼女は、安心したかのように、穏やかな表情だった。そんな彼女にフィルは、心の中で詫びを入れた。

下腹部に彼女は乗っている。だから、腹筋を使って上半身を起こした。

その勢いで。

脇に刺さるナイフを抜きだし。

脇腹に突き立てた。

「あぐっ」

フィルから見て、左手の方向へと吹き飛び。滑った。苦しそうに呼吸を繰り返す彼女を見て、やり過ぎた。と彼は、さらに申し訳なく思う。

立ち上がる。

血が数滴、地面に落ちた。

横向きに寝込むローテに近づく。その跡を血が印した。

くの字に折れ曲がり、横たわる彼女。「う そ…っ、き……」「
楽にしてやるからな」

頭をまたぎ、座り込む。正座をする格好のまま、ローテの頭を腿に乗せた。

肩を浮かせ、首を斜めにむけ固定した。腕を首周りに巻き付け、締めた。

「あっ……がっ……」

苦しむ声を少しあげ、ローテの身体は強張り、すぐに脱力した。

「馬鹿」

フィルは、巻き付けた腕を解き、首に手を添えた。さっきまで、乱れていた態度とは逆に脈は穏やかに波打っていた。

仰向けに、身体を動かし、ひざ枕をする。彼女が起きていたら、絶対にただじゃ済まされない。

苦難から解き放たれた後のような、安らかな顔。まだあどけない、少女の表情。

絶対に、起き上がったら気まずいよな。フィルは、そう予想する。頭を撫でる。

もし、一線を越えていたら？　そう考えるだけで、身震いする。未遂に終わったただけでそうなるのだから。二度と親密な関係には戻れないはず。

それに、そんな目で彼女を見たくなかった。

「っ痛う」

フィルは顔をしかめ、恐る恐る首を右下に向け、握ったままの右手を開く。

指の付け根に沿って一直線に切り傷が残る。閉じ切ったと思ったが、まだ傷口からは血がにじむ。

ローテの脇腹へは、柄でついた。鞘が上手く外れなかったから、刃を握りしめた。痛みがなかったから大丈夫だとたかをくくっていたが、地味に痛い。

「やっぱり、病院に行かなきゃいけないか」

そう独り言。

ローテを診てもらうなら、多分リーが一番いいのだろう。例えば、口説きが失敗しても、そこは目をつむらなければならなかった。

痛む右手を我慢しながら、首とひざ裏に片手ずつ通した。

気合いを入れて、立ち上がる。ローテを抱え込んで。ちょうど、お姫様を抱いているような状態に、似ていた。

こんな状態を警備隊の誰かに見られないことをフィルは祈った。そうでなくても、今日無断欠勤してしまった身だ。まさか、昨日が休みだとは思わなかった。確かに、仕事量が少ない事に疑問は感じていたが。

穏やかに眠る彼女が突然呻く。

微かでも物思っていたファイルは、小さく叫び声を上げた。

「大丈夫……だから」

そのようなわごとを何回も繰り返す。誰に対してそう言っているのか、ファイルには分からない。

何が大丈夫、だ。ファイルは、ため息をつくよりも、どうしようもないものを感じた。

あの子は、あたしよりも暗い所を持っている。と言ったのはリーだったか。

この年で魔術師をやっているのは、確かに辛いはずだ。皆からの期待を背負い、いつ賞金稼ぎに襲われるか分からない。

それなのに、弱音を吐いている所を見たことがなかった。

気を失っている今だって、誰かの事を気遣っている。

どれだけ意地っ張りなんだ、こいつは。

弱音を吐いてくれたっていいのに。

だけど。

畜生、と毒づく。無性にいらいらして、地面をおもいつきり踏み付けた。

そついいながら、誰も救えてないじゃないか。

殊に、彼女の赤い髪を見ていたら、痛切に思い出す。

ローテを抱えるファイルは空を見上げて、舌打ち。

過去の過ちを悔やむ自分が今も何も変わっていないから。

何も出来ないから。相手の苦しみをただ、黙って眺めるしかできないから。

茜色から、蒼色に衣を変える空は澄んでいた。

雲ひとつ存在しない、冬の天気。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3225e/>

泥棒達の引かれ唄

2010年10月8日15時57分発行